ようこそ史上最悪の詐欺師さん

時雨日和

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏休みを目前まで控えた７月の過ぎた頃。１人の男子生徒が高度育成高等学校へと編入してきた。

その男子生徒の名前は四月一日　千里《わたぬき　せんり》。クラスどころか学年の殆どとすぐに仲良くなるという超絶コミュ力を持っている。

しかし、そんな彼にも当然のように裏はあったが……

最近ハマったよう実を書いてみました。かなりのネタバレや私の勘違いや間違いが多数見受けられると思うのでとてもとても注意して下さいますよう。お願い致します。

割と叩かれるのを覚悟で書いてます。

未完多いのに新作出すとか……

目次

嘘つきの子は嘘つき　1
虚実混交　11
百家争鳴　26
暗中飛躍　37
捨身飼虎　46
狂言綺語　57
天理人欲　68
天花乱墜　80
名詮自性　91
戦戦兢兢　106
『　』　119
寤寐思服　130

嘘つきの子は嘘つき

『蛙の子は蛙』

俺を表すのならこの言葉が適切だろう。

『嘘八百』

これも入ってくる。そう、嘘つきだ。蛙の子は蛙、つまりは親も嘘つきだ。

でも、元々そうではないきっかけはあった。忘れもしないさ。

俺が１１歳の時に両親は借金を残して消えた。

そこから俺は子供から詐欺師になった。もちろん学校にも行った。でも、友達は出来なかった。そりゃそうだ俺だって嫌だから。

勉強はかなりしたな、学校もそうだけどそれ以外…

お陰でかなり稼がせてもらった。かなり楽できた。

そのせいでかなり大変だった。かなり苦しかった。

どんな事もやらなきゃならなかった。

そのせいで……

でも、やめなかった。やめられなかった。やめたくなかった。

それしかないから、それでしか存在を示せないから、それでしか生きられないから、それしか知りたくなかったから、だからみんな俺の事をこう言うのだ。
『ペテン師』と
でも、もしも…もしもだ。この俺が誰かのために自分を犠牲にするような選択があったとしよう。
実に美しいね。自己犠牲の精神はとても見習いたい。もしも俺がこんな状況に陥ったのならもちろんいつもの笑顔を浮かべてこういうだろうね。
「任せてよ」ってね。でも、最後にこう続ける。
「信じれるかどうかはわからないけどね」
みんなはどっちかな?
ちなみに選択を間違えると…
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
高度育成高等学校
話によれば希望する進学、就職先にほぼ１００％答えるらしい。
嘘、とまではいかないが何となく怪しい。そう感じるのは同族的な本能なのかな。
まあ、ようはよく分からないという事だ。ただ、１つ確定しているのは今日から俺がここに編入するという事だ。

7月、本当に夏休みが始まる直前頃。こんな時期に、なんて思われるだろうな。まあ、そんな事は知らない。だって学校側から編入の案内が届いたのがつい先日なのだから。俺には何の問題もない。

なんて心の中での言い訳合戦に花を咲かせているそんな時に目的地についた。

『1年D組』これから俺が過ごすクラスだ。

うんうん、言われなくても分かっているよこの学校の仕組みは。アルファベット順に優劣が付けられている事ぐらいね。説明受けたし。そして、担任の茶柱先生が教室に入りそれに続いて俺も入る。

教室内が一瞬で静かになる。それと同時に俺へと注目が集まる。

「先生～、隣にいるのは誰ですか～?」

おちゃらけた声で質問が来た。それに答えるように先生は話し出す。

「気になっているだろう。こいつは今日からこの学校に編入してきた四月一日だ。では自己紹介を」

そう促され、俺はそれに応える。

「四月一日　千里（わたぬき　せんり）。『わたぬき』は知っている人は知ってると思うけど『しがつついたち』と書く。皆とは仲良くしたいと思ってる。だから目下の目標は皆とは　連絡を交換する。という訳で気軽に話しかけて欲しいな。よろしく」

比較的いろんな意味で軽めに自己紹介をして、指定された席に座る。
「やあ、よろしく。確か平田　洋介だっけかな。よろしく洋介」
「驚いたな。もしかして全員の名前を覚えてるとか？」
「もちろん。仮にも全員と仲良くなりたいと公言しているからな」
その後授業や休み時間、昼休みなどで着々と連絡先を交換しついには残りも少なくなっていった。
そして、放課後
「やあ、堀北鈴音と綾小路清隆」
そう、この二人が特に話しかけてもいなかったからな。今のうちにというやつだ。
「朝も言ったように俺みんなの連絡先が欲しいんだよね。友達になりたいだ。ダメか？清隆、鈴音」
「人の名前を気安く呼ばないでくれるかしら」
おっと、かなり不機嫌。
「ん？あぁ、悪いな馴れ馴れしかったな。ダメだったか？下の名前で呼ぶの」
「親しくもない人に気安く呼ばれるのが嫌なのよ」
「……清隆は？」
「俺は別に。好きに呼んでいいぞ」

「そうか！じゃあ、清隆も俺の事を千里と呼んでもいい！まあ、もちろん決めるのは清隆だけどな」
「わかった。じゃあ遠慮なく千里と呼ばせてもらう」
「ああ！それと、連絡先」
「ああ」
　俺は清隆との連絡交換に成功した。
「す……堀北は？して貰えるか？」
「……」
「やべぇよ清隆。出会って1日もしない内に嫌われてしまったぞ」
「まあ、気にする事はないと思うぞ。きっといずれ機嫌も治すさ」
「そうか…まあ、いいや。それじゃあな、ありがとな清隆。俺これから生徒会長に挨拶してくるわ」
「!!?」
　おおう、反応した。反応した。
「ん？どうした？堀北」
「…何でもないわ」
「そうか、じゃあ、また明日な」

そして、俺は道行く同クラスのみんなへ挨拶を終え。生徒会長の元へと向かった。
……なんて、そんな事はしない。
というより、もう既に終わらせていた。
だから俺は昼休みの時のことを思い出しながら寮へと向かった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
昼休み
俺は3年のクラスへと足を運んだ。もちろん目的は生徒会長。堀北学に会うためだ。
3年A組の教室の前に行き、ノックしてから扉を開き目的の人物の名前を挙げてみたもののどうやら留守のようだった。話によれば生徒会室らしい。
そして、生徒会室へ
着いてすぐにノックをして入れさせてもらった。もちろん目的の人物もいる。
「失礼します。はじめまして。本日転入しました。四月一日　千里です。本日は生徒会長へ挨拶に参りました」
その生徒会長は椅子に座り、書類等を眺めながらこちらにほとんど目を向けずに話し出す。
「そうか、殊勝な事だな。知っていると思うが俺は生徒会長の堀北学だ」
「はい、存じております よ。では生徒会長は俺の事を知っていますか？」

「知らないな。今日初めて聞いた名だ。四月一日なんて苗字は珍しいからな、聞いていたら忘れないだろう」
「では…『千条時中事件』と言えば、分かりますか？」
　その言葉を聞いた途端。今まで書類を捲っていた手が止まり、目が俺の事を捉えた。
「…そうだな、聞いたことはある。つまりお前がそうなのか？」
「ええ、逆に驚きです。生徒会長は知っているんですね。かなり極秘にされていたと思いますが？」
「まあな」
　この事については本当にかなり極秘にされていた。その証拠にここまで聞いていた橘書記はこの話に付いていけてない。そして、空気を読んで話に入ってこない。
「というより、聞かされていたんじゃないですか？」
「どういう事だ？」
「会長、俺の名前を聞いた時…いや、俺がここに入ってくる時から既に目の動きがおかしかったんですよね。それを書類を見る素振りで誤魔化していましたね」
「…ほう。以外にも…いや愚問か？」
「はい。俺にそれは愚問もいいとこです。嘘は俺にとって呼吸も同じですからね」
　会長への挨拶という名のジャブはおしまいにして本題に入るか。

「それでは会長。俺は今日から1年D組に所属になりました。このクラスには会長の妹さんがいますね」
「そうだな」
「もし、俺が何かの理由でその妹さんを利用する。そしてその際に妹さんが壊れてしまったらどうしますか？」
「関係ないな。お前が妹をどうしようがな。それは全て妹の責任だ、俺自身には何も無い」
「…それが聞きたかったんだですよね。貴方と…綾小路清隆は敵に回しては怖いですから」
「……」
「それでは失礼します。橘書記、今度は貴女も会話に混ぜれるようなお話がしたと思いますので」
　アフターケアも忘れないのが俺の流儀。
　なーんちゃって。
「…四月一日　千里か」
「会長、あの生徒は一体…」
「そうだな…綾小路と南雲並に危険人物だろうな」

そんな会話が外からも聞こえる。危険人物…ね。
まあ、他の人に比べたら危険かもね。だって、俺に信じられる要素なんてないんだから。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

という事だ。
危険人物というレッテルを既に生徒会長に貼られてしまった俺。俺の見立てでは生徒会長は俺の事を公言するなんてつまらない事をするような人ではない。だから俺が何かアクションを起こさない限りは誰も俺については知らない。
でも、俺はそんな事はしない。ずっと隠れているような事はしない。俺の正体がバレようが、事件起こそうが俺は時が来れば隠れない。少し見ていてわかっている。清隆は俺とは正反対に目立とうとはしないようだ。
Ａ組へと上がろうとするクラスの雰囲気。その中で埋もれようとしている清隆の考えは俺からして見れば浮いている。真実を知っている俺だからこそ思うことだ。
だけど、俺はそれを否定しない。だから俺は清隆の傀儡にでもなるとするかな。そうすれば自ずと清隆の存在はある程度は隠せるからな。ただ、清隆が素直に俺の事を使うかどうかが問題だろうな。まあ、どうにかして使ってもらわないと困る。…いや困らなくはないか。別に俺がしなくても清隆が他のやつを使っていけばいいだろうし。

つまりは無茶をしないとＡ組へは上がれない。そう、俺は何としてもＡ組へと上がらなければならない。約束された進路を得るためにはそれしかないからな…

そのためなら……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

四月一日　千里（わたぬき　せんり）

１１月３０日生まれ、ＡＢ型

学力Ａ

知力Ａ

判断力Ａ

身体能力Ｂ＋

協調性Ａ

評価

テスト、面接に於いても完璧にこなしています。しかし、我々が持つ情報によりＤ組への配属になります。正直、この学校にいる事さえ忌避するレベルの生徒でしょう。今後の学校生活に於いて要注意して行かなければならない。

虚実混交

俺が編入してきて数日、今日は終業式だ。何とも早い。まあ、しょうがない。朝、登校しようと寮を出て歩いていると後ろから聞き覚えのある声がする。

振り向くと洋介と恵の2人だった。付き合っているらしい2人は今日も仲良く一緒に登校している。

「やあ、おはよう洋介、恵」

「おはよう四月一日君」

「おはよー」

「今日で一学期が終わり、数日しか俺はいなかったけど」

「それでも四月一日君は既にみんなの輪に入っているんだから凄いよ」

「確かに、他のクラスの子からも話を聞くし、もしかして他のクラスにももう友達いるの？」

俺はその恵の質問にピースをしながら答える。

「もちろん！流石に全員は無理だったけどな」

特に龍園翔には挨拶ひとつできてないしな。

「充分すごいよ」
「そうか、ありがとな。あ、そうだ、２人ともさ今日の夜…大体８時頃かな、空いてる？」
「８時頃？多分空いてるよ」
「私も空いてると思う」
「じゃあさ、ちょっと俺の部屋に来てもらえないかな？だめ？」
「僕はいいよ。軽井沢さんは？」
「うーん…まあ、平田君が行くなら行くかな」
「ありがとう！それじゃあ８時頃になったら来てくれ！」
　そう言ったあと軽い雑談をしながら学校へと向かった。この２人は中々に面白い。もちろん多重の意味でね。
　そして、終業式も終わり、ＨＲも終わった。つまりここからは夏休みも始まる。
　そして、俺がそろそろ席を立とうとする時声をかけられた。
「なあ、四月一日一緒に飯でも食わねぇかー」
　かけてきたのは寛治と春樹の２人だった。その後ろには健と清隆がいる。
「あぁ、いいよ。学食？」
　その問に２人は頷いて答えた。それから４人と共に学食へと向かい適当に定食を頼み５人で席についた。

　そして、雑談をしながら食べ始めているとこんな話題になった。
「なあ、四月一日って色んなやつに話しかけてるみたいだけどさ、誰か気になるヤツでも見つけたか？」
「気になるヤツ？そうだな…あ、１年Ａクラスの坂柳有栖かな」
「え?!マジで!?」
「あぁ、まだ１度も会ってないからな。すげぇ気になる」
「だぁ…そういう意味じゃねぇよ!!好きな奴とか出来たかって話だよ！」
「なんだ、そういう意味か。それなら今はいないな。全員まずはお友達からでって感じ」
「…その言い方、告られでもしたか？」
「いいや？」
　嘘だ。フランクで親しみやすく、しかも結構顔もいいと評判な四月一日君は結構おモテになる。何回かある。だけど、『もっと君の事を知ってから考えるよ』という謳い文句で終わらせる。
　つまり、簡単に振って関係終わりではない。というちょっとだけ希望を持たせるのが今後どう転ぶかは知らないけどな。
「それとさ、今更気づいたんだけど四月一日の眼鏡って何か普通と違くね？」
「あぁ、今更だな。俺って極端に目が悪いからなちょっと特殊なんだ」

そう言ったらふーんという明らかに興味のない風の返しが来る。じゃあ聞くな!!

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

そして、夜8時前頃俺の部屋のチャイムがなる。

「こんばんは、待ってたよ」

訪ねてきたのは清隆だった。

「どうしたんだ?こんな時間に呼び出して」

「まあ、ちょっと話があってね。さあ、上がってくれ」

「さて、まあ、清隆を呼び出したのは他でもない。今後の事について話そうと思ってね」

「なぜそれを話し合うのが俺なんだ?もっと適任がいると思うぞ。堀北とか平田とか」

「まあ、お前を選んだのは色々と理由があるけど決定的な事がある」

「…それは?」

この言葉を発するのに少しだけ不自然な間が生じた。恐らく何を言われるか何となく察したのだろう。だから俺は単刀直入に切り出した。

「それは、お前が『ホワイトルーム』での最高傑作だからだよ。綾小路清隆」

「………」

清隆の視線が鋭くなる。威嚇…いや、ちょっとだけど殺気か?そんなものを色々含ませた視線。その中で1番大きいのが。

「何で知っている？と聞きたそうだな」
「…そうだな。普通の一生徒…いや、普通の人間が知っているような事じゃないからな」
「そう。今清隆が言った通りだよ。俺が普通の人間じゃないからだ」
「どういう事だ」
「そうだな…いや。これを話すにはお客さんが足りなすぎる」
「ますます意味がわからないな。お前は何を考えているんだ」
「まあまあ、これからお客さんが来るんだ。お前はちょっとクローゼットにでも隠れてくれ」
「は？」
　そして、チャイムがなる。
「ほら来た。早く隠れて隠れて」
　そう言って俺はクローゼットに清隆を仕舞ってお客さんを迎える。
「やあ、いらっしゃい。悪いね２人ともこんな時間に呼び出しちゃって」
「いやいいんだ。気にしないでくれ」
　もちろん来たのは洋介と恵の２人だった。２人を中に招き入れ、コーヒーを用意してからテーブルに置いて座る。
「さて、２人を呼んだのはね今後の事についてなんだ」

「具体的に言うと？」
「そうだな。俺らがＡクラスに上がるための事だな」
「なるほど。君はＡクラスを狙うんだね」
「まあな。ちょっとした目的がね」
「ちょっと待って。Ａクラスに上がるための話し合いなら平田君はいいとしても何で私？普通堀北さんとか櫛田さんとかじゃないの？」
「いいや、恵。君は今の２人に負けないくらいの力はあるよ。それにね…」
一口コーヒーを飲み、口を潤してからその続きを話す。
「軽井沢恵。君には人には言えない過去があるね」
「っ!?」
「四月一日君」
「平田洋介。君にもあるよね過去が」
「……」
「洋介。君の幼馴染はいじめられていた。そして君はそのことに気づいていながら、その助けに応じなかった。そして、彼の最後の助けにも応じず目の前で自殺未遂。彼は今も脳死状態。その事が君のトラウマとなり、罪悪感から周りの皆を助けようとしているね」

「…………」

「恵」

「っ…!?」

「君は酷いいじめを受けていた。それはそれは本当に酷いね。特に酷いのは脇腹にある傷だね。それでもういじめられまいとクラス内の地位を確立させるために洋介と付き合っている振りをしているんだろ?」

「ど…どう…して……?」

恵は洋介と違い完全に怯えている。完全なるトラウマになっている。恵にはこれを知っている俺を恐れている。この情報だけで、このいつもと違う雰囲気だけで彼女を完全に掌握できるのだから。

「なぜ、か…簡単に言うのなら、俺が普通の人間じゃないからな」

「…どういう事だ?」

さっきまで沈黙を通していた洋介が口を開いた。

「そうだな…なら、少し俺について語ろうか」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

俺、四月一日千里はおよそ普通の人間とは呼べるものではなかった。小さい頃から親からは嘘を…いや、人を欺く術を教えられていた。両親は詐欺師であるという事も要素

の1つだ。
その両親はとある仕事に失敗し、負債…借金を抱えた。故に両親は俺を取り残し何も残さずに消えていった。
いや、1つだけ残したな。莫大な量の借金を。
それからは毎日のように借金取りが来たさ。朝だろうが、昼だろうが、夜だろうが。それが3日くらい続いていた時俺は行動に出た。
『僕の両親は僕を捨てた。つまりは僕に取り立ててもそれはあの人たちのお金じゃなくて僕個人のお金だ。僕は何の署名もしていない、僕からお金を取るのなら出る所に出る覚悟が必要ですよ』
そう言った。そうしたら借金取りは家族である事は覆っていないから君はまだ家族である両親の借金を返す義務があると言った。
よく分からない理論だけど、これが法律に冠するかとかは当時の俺には分からなかったが、こう答えるというのは予測できていた。なので俺は
『ならばこれを見てください。昨日僕が取った僕の戸籍です』
その戸籍には俺の名前しかのっていない。それを見たその借金取りは動揺する。頭の悪い借金取りだった。これは俺が作成した偽物だった。よく見れば違うというのは少し注意深く見れば気づく。

これが俺が詐欺師としての初めての仕事であり、一歩だった。
そして、借金取りはその偽の戸籍を持っていこうとした。
『他人の戸籍を無断で奪う…この意味分かりますよね？』
それを言った瞬間借金取りは強行手段を取ろうとしたのか、俺に対して恐喝をし、俺に殴りかかろうとした。そこで俺はポケットからあるものを取り出した。
携帯だ。つまりはこのやり取りを録音していたという脅し。それにはかなり青ざめていた。そして俺はこう持ち出した。
『両親の居場所だと思われる場所が記された手帳を差し出します。なので、今後僕には関わらないでください。さもなければこの録音を出す所に出さなければならないので』
その次の日から俺の家に来なくなった。もちろんの事だが差し出した手帳も録音したという言葉も全て嘘だった。
当時１１歳の子供が大人相手にここまでの行動と言動は明らかに普通ではない。小学生とは思えないような知識量、嘘を嘘とは思わせない度胸と態度、ポーカーフェイス。これは天才とかそういう類のものではない。ただの異常者としか思えないだろう。
それから俺は１度四月一日千里という名前を捨てた。何故そんなことが出来たかというのは、当時の小学校の校長を丸め込み取り込んだからだ。上手く利用させてもらった。その生活の中で詐欺行為は数知れず。かなり貯蓄も溜まっている。およそ未成年

の子供どころか、そこら辺にいるサラリーマンの年収をも軽く超える程の貯蓄がものの半年で集まった。

それからは独り立ちした。たまに校長とは連絡を取り戸籍を変えていた。そして、俺は1つ大きな仕事をした。それが両親が失敗した仕事だった。これは両親の仇とかそんな心温まる理由じゃない。両親よりも俺が優れているという歪んだ感情が生んだ悲劇だった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「俺はその仕事の電話の最中、かなりその電話に集中していたんだろうな。交差点、車通りの多い道だ。信号待ちで止まりながら電話をしていた時、後ろから押されて体勢を崩したことに気づいた時にはもう遅かった。乗用車がかなりのスピードで走ってきた。その車は俺をかわすことなく突っ込んできた。その事故で俺は脳の一部を損傷し、視力の低下とほとんどの色が見えなくなった。それは今も続いている。眼鏡を外すとほとんど視界がない」

そう、極端に言うと俺は眼鏡を外すとボヤけているものがモノクロと重なってほとんど視界が真っ黒か、真っ白のように感じている。

「…俺がAクラスを目指す理由が分かっただろ?俺は大罪人でこれからの人生を確立させるような決められた進路を得るためにAクラスを目指すんだ」

２人は呆然と俺の事を見ていた。無理もない、明らかに住む世界の違う話だ。
「……それで、何故君が僕達の過去を知っているかの答えが出ていないが？」
洋介が平静を保ちながら聞いてくる。本当にこいつは優秀だな。
「俺が編入してきた理由だ。俺は元々普通に入学する筈だった。だけど、事故のせいで予定が狂い別の高校に１度も入学してから予定を遂行した。その予定がこの高校の１年の情報を全て集める事だ」
「!?」
「!!」
「その為に理事長には無理を言ってしまった。だけど、それすらもチャラに出来るような取引をした。その詳細は流石に話せないがな」
「つ、つまり君は１年生全員の情報持っているということなのか？」
「そういう事だ」
「君が皆の連絡先を欲しがっていたのは」
「もちろん、情報を集める一環だ。ただ、友達を作りたいっていう理由も無かった訳では無い。今まで作れたことも無かったからな」
「その言葉は、本物かい？」
いつもの洋介の目とは違う。俺の本性を徹底的に暴こうとしている目だ。だから俺は最初に話しかけた時のような笑顔で答えてあげた。

「あぁ、もちろん本物だとも。だけど、信じられるかどうかは分からないけどね」
「あ…あのさ…」
恵だ。さっきまでの動揺がある程度収まり、話せるような精神状態まで戻っていた。
「な、何でその事を話すの？普通さ、わ、私達の事を利用するならさ、自分の弱みとかって隠しておくものじゃないの？」
「恵。君はここまで話した俺の言った事を信じれるの？詐欺師であり、大罪人のこの俺の言葉を」
「分かんないけどさ…でも、理由はあるんでしょ？頭の良いあんたなら」
「……」
「僕は信じるよ四月一日君の言っていること。確かに君はかなり危険な人かもしれないけど、今は同じクラスの仲間だ。僕の過去は消えないし、今やっている行動も罪滅ぼしかもしれないけど、今やっている事に後悔はないからね」
「…お前らの言いたいことは分かった。腹を割って話したんだ俺たちでグループを作らないか？」
その問に2人は1度顔を見合わせてから俺に向けて頷いた。
「そうか…恵」
「な、なに？」

「何かあったら俺にも言ってくれ、俺もお前の事を守る。約束しよう」
「え……」
「さて、悪かったな2人共、遅くまで付き合わせて。今日はこれまでにしよう」
俺がそう言って立ち上がると2人もつられて立ち上がり、一言、二言交わした後に2人を見送った。
「さあ、出てきてもいいぞ」
そう、クローゼットに向かって喋りながら開け放つ。
「…何分閉じ込めている気だったんだよ。暑すぎるだろ」
「夏だからな。でも、聞く価値はあっただろ？」
「お前が言っていることが本当だったらな。平田と軽井沢の事は反応からして本当らしいが」
「まあ、それを信じるかはお前次第だよ。俺はそれについての答えは出さない。出した所でどれが本当かもっと疑心暗鬼になるからな」
「それもそうだ…だけど、1年の情報を集めるために入学を遅らせた。これ、少し嘘を混ぜてるよな？」
「へぇ、どこ？」
「…他の2、3年の情報も集めていたんだろ？」

「……」
「沈黙は肯定と受け取っていいんだな？」
「お好きにどうぞ。俺が喋ると混乱するだろうから黙ってただけだ。まあ、少なくともAクラスへ上がりたいってのは紛れもない真実だ。これだけは完璧に信じてもいい」
「…そうか」
「それと、俺は俺の過去や罪が露呈しようと構わないと思っている。だから、俺は自由に動く。清隆」
「なんだ」
「お前が何か考えついて、俺が行動に移せるような状況なら俺を傀儡に使っていい。堀北や櫛田だけじゃなく、俺という駒も増やした。これでお前の望む目立たないを遂行すればいい」
「…そうか、なら考えておくよ。今日は帰る」
「あぁ、遅くまで付き合わさせて悪かったな」
「気にするな。有用な情報も聞けたしな。お前の弱点は目だってな」
俺はその答えに自然と笑みが零れた。そして、清隆は部屋を出ていった。
……悪いな清隆。俺はお前の傀儡には喜んでなるが、ただの傀儡にはなるつもりはないぞ。

俺は…お前すらも利用する。

百家争鳴

夏休み

この学校の特別行事の1つが今日から始まる。それが、南の島のバカンスというものだ。

既に全員が船に乗っていて動き出し、現在海の上にいる。うん、風が気持ちいい。

人生初の船だが、船酔いも無いし不満はない。

ただ、不安がある。この学校の事だ、これも何かの試験だと思ってた方が利口だろうな。

さてと、今は最低限この船旅を楽しんでおこうかな。こんな経験無かったし。

ゆっくりと海を眺めながら船首の方へと歩いていると馴染み深い人物に遭遇した。

「やあ、清隆。船旅は楽しんでいるか？」

「千里か、楽しんでるよ。揺れは少ないし、設備も充実してる。ぼーっと海を眺めるだけでも時間を潰せそうだしな」

「ただのバカンスだと思うか？」

「どうだろうな。この学校の事だしな」

「やっぱりお前もそう思うか…ん？お、じゃあな清隆。また後で」
そう言って俺は手すりに捕まりその上の階の手すりに捕まってショートカットした。
「わっ！び、びっくりした～」
「やあ、お二人さん。楽しんでいるか？」
「あはは…四月一日君も楽しそうだね」
「ん、まあね。ただ、手放しで楽しめるような気分では無いんだけどな」
後半は小声で言ったためか2人は不思議そうな顔をする。
まあ、クラスポイントが少ない今だしな。今後のことを考えると今から胃が痛いというものだ。
「あ、そうだ四月一日君は見た？上のデッキからの眺め！超ヤバイんだよ！」
恵はあの後からも傍目からも俺から見ても態度を変えずに俺と接する。
ここが彼女の優秀だと言えることの1つだろう。周りを見る力と見せる力。だから俺も彼女に合わせて自然な態度を取るのだ。
「いや、まだ見てなかったな。そんなに凄いなら今から…行ってくる」
先程と同じようにショートカットで上まで登る。下では2人と通りかかった誰かの驚いた声が聞こえてきてちょっと面白かった。
俺が悠々と手すりから上がって来た所で突然

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まり下さい。間もなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義のある景色をご覧いただけるでしょう』

そんなアナウンスが聞こえた。それと共に続々と生徒達が集まってくる。既にいた清隆達…あいつ来るの早くないか？Dクラスのグループに俺も加わる。

「おい邪魔だ。どけよ不良品共」

横暴な男子生徒達が俺たちの方へと威圧しながら来る。そして、清隆が1人の男子生徒に肩を押される。不運だな、清隆。

そして、その言葉に健が応戦するが何もせずにその後の言葉には何も返さずにそのまま見送って俺たちは彼らから離れた。

それからすぐに洋介が加わるが、またすぐにどこかへ行ってしまった。

そう言えば、未だに堀北の姿が無かった。まあ、こういう感じの好みではないだろうしな。

それから俺は人混みを避け1人ぼーっともうすぐ見えるであろう島の方を見ていた。

「四月一日君」

俺が向いている方向とは別方向から声がしてそのほうを向くと、桔梗が隣にいた。近いな、ビビった。

「桔梗か。もうすぐ島が見えるらしいな」
「だね。楽しくなるといいね！」
「そうだな。これでＤクラスの仲が深まればこれからも楽だろうな」
「楽？」
「…いや、なんでも。お、島が見えてきたぞ」
って、いない……いつの間に……
櫛田桔梗…こいつの事もかなり警戒している。こいつが起こした事件はとてもとても凶悪であり、俺と似たような手段だ。公に出すというのは俺との区別ポイントだけどな。
…無意識なんだろうな。俺はこの櫛田桔梗との会話が同じクラスにしては極端に少ない。六助と同じくらいなのだから驚きだ。まあ、今回ので超えたけど。
そして、船は島を一周した所でアナウンスがなった後に上陸した。
Ａクラスから順に降りるということなので俺は最後尾で待っていた。
そして気になるのが、私物の持ち込み禁止という部分。俺の予想がどんどんと確信に変わっていきそうだ。
入念なチェックが終わり、砂浜へと降りてすぐに茶柱先生による点呼が始まる。俺が呼ばれるのは最後のため少しだけ余裕がある。その中で俺は坂柳有栖がいないことに

気づいた。

…まあ、それもそうか。

滞りなく点呼も終わり、用意された壇上の上にAクラスの担任真嶋先生が立つ。

「まずは今日、この場所に無事にたどり着けたことを、嬉しく思う。しかし、その一方で1名ではあるが、病欠で参加出来なかった者がいることは残念でならない」

やはり、坂柳は来れなかったようだ。

それから真嶋先生は無言で壇上から生徒を見下ろしている。その一方で、俺たち生徒は先程の話で出た生徒に同情するような声が小さく聞こえてきたり、また、その一方で他の先生達は何やら忙しく準備をしていた。

「ではこれより、本年度最初の特別試験を行いたいと思う」

「え？特別試験って？どういうこと？」

俺が聞き取れたのは寛治の声だが、他のクラスからも同じような内容の声とざわめきが聞こえる。

ただ、一部は無反応な者、笑っている者、ため息をついている者など、およそ予想通りだと感じている奴らもいるようだ。

俺か？俺はおそらく笑っている者だろうな。

「期間は今から1週間。8月7日の正午に終了となる。君たちはこれからの1週間、こ

の無人島で集団生活を行い過ごすことが試験となる。なお、この特別試験は実在する企業研修を参考に作られた実践的、かつ現実的なものであることを最初に言っておく」

「無人島生活って…船じゃなくて、この島で寝泊まりするってことですか？」

「そうだ。試験中の乗船は正当な理由無く認められていない。この島での生活は眠る場所から食事の用意まで、その全てを君たち自身で考える必要がある。スタート時点で、クラスごとにテントを２つ。懐中電灯を２つ。マッチを１箱支給する。それから日焼け止めは制限なく、歯ブラシに関しては各自１つずつ配布することとする。特例として女子の場合に限り生理用品は無制限で許可している。各自担任の先生に願い出るように。以上だ」

そして、細かいルールとして

各クラスに３００ポイントが支給され、クラスに１つ配られるマニュアルに載っているものは自由にポイントで入手できる。しかし、このポイントは試験終了時の残りポイントがそのままクラスポイントに加算される。

また、試験中のリタイアした場合クラスに３０ポイントのペナルティがある。

そして、この試験におけるテーマは『自由』最低限のルールを守っているのなら何をしても良いという事だ。

ここまでが真嶋先生の説明。ここからは各担任で説明を受ける。

全員に腕時計が配布される。この腕時計は時刻だけでなく体温や脈拍、センサーやGPS、緊急を知らせるボタンが備わっている、これは許可なく外すことは出来ない。ちなみに完全防水である。しかも万が一壊れてもすぐに交換が可能である。

そして、トイレだが簡易トイレがクラスに1つずつ支給される。それに使用される給水ポリマーシートは無制限に支給される。

まあ、予想通りかなりのブーイングが女子からあがる。無理もないな。ここからは寛治とさっきの争いだ。

「無理！絶対無理！」

「トイレくらいそれで我慢しようぜ。揉めるようなことでもないだろ篠原」

「段ボールとか絶対無理だし！それに男子も近くにいるんでしょ？キモいし！」

さすがに……これはちょっと心外だな…

「んだよそれ。俺たちが変態みたいな扱いされるのは納得行かねーんだけど」

平行線な言い争いが続いている中で、茶柱先生とBクラスの担任星之宮先生、そして清隆が話している。その会話は2人の声にてかき消され俺の耳に届いては来なかった。

ちょっといい加減に静かにして欲しいものだ。

「ではこれより追加ルールを説明する」

そう切り出される頃には星之宮先生は姿を消していた。

「追加ルール？まだあるのかよ～…」
「まもなくお前達にはこの島を自由に移動する許可が与えられるが、島の各所にはスポットとされる箇所が幾つか設けられている。それらには占有権と呼ばれるものが存在し、占有したクラスのみ使用できる権利が与えられる。どう活用するかは権利を得たクラスの自由だ。ただし占有権は効力上８時間しか意味を持たず、自動的に権利が取り消されることになる。その都度別のクラスに取得する権利が発生するということだ。そして、スポットを一度占有するごとに１ポイントのボーナスを得ることができる。ただし、このポイントは暫定的なものであり、試験中に使用することは出来ない。なので、試験終了時にのみ精算され、加算される仕組みになっている。学校側は常に監視しているため、このルールにおける不正の余地はない。その点には注意するように」
そして、これに加えリスクが箇条書きでマニュアルに書かれている。
一、スポットを占有するには専用のキーカードが必要である
一、１度の占有につき１ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用できる
一、他が占有しているスポットを許可なく使用した場合５０ポイントのペナルティを受ける
一、キーカードを使用する事が出来るのはリーダーとなった人物に限定される
一、正当な理由無くリーダーを変更することは出来ない

ここに来て重要な役割が登場する。『リーダー』だ。このリーダーという仕組みはスポットを占有する事に必要である。

そして、最終日の点呼のタイミングでリーダー当てがあるという事。これにより、見事言い当てることが出来たのなら当てたクラス毎に５０ポイント。すべて当てたのなら１５０ポイントが得られるが、間違えた場合逆に５０ポイント失う。リーダーの秘匿は重要な鍵になるであろう。

ここまでで粗方の説明は終わったのだろう。そこから茶柱先生は俺たちの会話には入っては来なかった。

リーダーは後で決めること、スポットの話からトイレの話へまた戻っていた。やはりまた男子対女子の争いになる。しかし、意外なことに恵はそこまでトイレには文句はないようだ。

それからは幸村も話に加わり結構一触即発のようなどころか爆発した後ようにピリピリとしている雰囲気。

そして、ほかのクラスたちが移動を開始しているのを見て痺れを切らした寛治や健、春樹の３人は森の中へと入っていった。洋介も最初こそ止めようとしていたが、それを聞かない３人にはもう何も言わずに注意だけして止めなかった。

その直後に洋介は俺に目を向けた。普段は必要のない時でさえ色んな人に声をかけ

るほどの俺が未だにほとんど会話に参加してこないのが不自然であり、不思議だったのだろう。もしかしたらちょっとだけでも恨みを感じているかもな。だけど、俺は今回のポイントの使用方法についての話し合いには参加しない。なぜなら、俺は1つもポイントを使わずとも生活できる能力は備わっているからな。支給品だけでも十分にありがたい。

……面倒くさいだけだろと言われてしまえば何も否定出来ない。

ちなみに健のトイレの処理は手の空いていた俺と清隆でやった。こういうサポートはするぞって事の意思表示を汲み取ってもらいたい。

全員で移動を開始した。

時間がある今ここで1つ独白をさせてもらう。今回の試験における俺の立ち位置だ。

この島での生活では自分からクラスを表で指揮することはしない。理由としては俺無しで皆がどう動くかを測りたいというのが主だ。正直に言うのなら俺は1年全員の情報はある程度持っている。だけど、数値では測れない能力というものがある。俺はその存在を知っているし、その存在に泣かされたことも多々ある。だから、この状況で誰がどんな働きをするかを見極めておきたい。今後のためにも。もちろん頼まれればどんな仕事でも俺はクラスのためにサポートする。働きもする。ただ表立って指揮は取らないというだけだ。

……ここまでかなり偉そうに考えているが、俺だって万能じゃない。出来ないことなんて数え切れない程ある。だからその為にも俺はこれからの事を考えながら、最後尾から前にいる愛理の危なかっかしい足取りを見ながら進むのであった。

暗中飛躍

試験5日目の夜中
「どうしたものか…」
端的に言うのであれば遭難した。通常ならば夜中だろうが、迷路のような所だろうが何とかなるが、現在の状況であるならば例え昼間だろうが俺は帰り着くことは出来ない。
なぜなら、俺の最大の弱点…眼鏡が完全に破損し、レンズが使い物にならなくなってしまったからだ。しかも不運なことに両方のだ。
「………どうしたものか」
〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰
独白後から
寛治たちが川とその近くにスポットを見つけ、全員でそこに向かった。そこを拠点とした。そこでリーダーは桔梗の推薦と洋介の後押しで堀北に決まった。
それから各々これからの生活について思案したり、薪を拾いに行ったり、川の方に行ったりと比較的自由行動の時間となっている。

「なあ、洋介」
「ん？どうかした？四月一日君」
「３０分くらいでいいんだが、ちょっと離れていいか？」
「１人でかい？あまり、褒められる行動じゃないけど。何をするの？」
「なに、少し辺りを見ておこうと思ってね。上から」
「…そうだね。それは１人じゃないと危険だね。だけど、四月一日君。気をつけて。いくら君でも流石に心配だ」
「ああ、分かってる。気をつけていくよ」
　そう断りを入れてから、近くにある中で１番背の高い木を探しそれに登っていく。下ではこの光景を見て驚きの声があがる。まあ、それをスルーして俺は上まで登りきる。
　そこから見た光景の感想としてはあまり収穫はない。船から見た景色とあまり変わらない。という感じだった。強いて言うのならＣクラスの動向が見やすい事があげられるだろうな。これからはあまり上まで登る必要ないかもな。
　とりあえず予定通り３０分経ったくらいで降りる。
「おい四月一日！お前すげぇな！」
「ん？ああ、まあな。こう見えてもね運動は得意なんだ」
「ふーん、ムカつくな」

「ハッハッハ、なんとでも言え」
悔しそうな健にわざとらしく偉そうにしてみた。うん、皆の反応も悪くないみたいだ。
そうこう遊んでいたら森の方から清隆達が戻ってきた。その中に1人この場に居るはずのない人物が。
「お？おやおやや、誰かと思えば澪じゃないか。いつから皆と仲良くなったんだ？」
この言葉に澪は心底嫌そうな顔と鬱陶しそうな顔をした。
「四月一日……」
「へえ、俺の事覚えてたんだな」
「当たり前でしょ。あんだけウザかったら」
「それで？ここへは何しに？Dクラスの友達にでも会いに来た？」
「んなわけないでしょ」
「だろうね。まあ、大方龍園翔と対立でもしたって感じか？」
「ほんとウザイ」
そう言って俺から背を向け完全に拒絶の姿勢を見せる。
伊吹澪という生徒は比較的わかりやすい。人の事を信用しない自分だけというタイプだ。だから今回も単独行動を取っている。

「ねえ、四月一日君」
　後から声をかけてきたのは堀北だった。俺は堀北の方を向き爽やかな笑顔を向けながらどうかしたかと聞く。
「あなた、以前何かやっていたの？」
「鬼ごっことかくれんぼ」
「…真面目に答えて」
「何を言う！俺は真面目に答えたぞ!?小さい頃から鬼ごっことかくれんぼをして、気づいたらストリートのパルクール並になっていたんだ」
「……そう、真面目に答えないのならいいわ」
　どうやらますます嫌われた。
　俺は手持ち無沙汰になってその場で苦笑いをしながら頭をかいてた。
「ねえ、何なの？あんた」
「聞いてたのか」
「そりゃ、あんだけ力説されてたら嫌でも聞こえるわよ。んで、どこからが嘘？」
「俺は本当の事しか言ってないぞ？恵」
「あんだけ運動神経高かったら凄いトレーニングしてるって普通思うでしょ。それか、凄い天才かのどっちか」

「…じゃあ、恵。ゆっくり考えてみろ。俺の以前までの境遇と俺がさっき言った言葉を無理矢理でもなんでもいいから合わせてみろ」
「はぁ？そんな事言われても……!?あんた!?」
気づいたみたいだ。なら答えなくてもいいな。だから俺はその場から離れた。
さっきも言った通り、俺は１つも嘘は言ってない。ただ、言葉が足りないだけだ。友達と仲良く、何てものでは無い。捕まれば、見つかれば終わりの鬼ごっことかくれんぼ。
しばらくしているとクラスの殆どが集まってくる。俺も途中から食料探しのメンバーに加わり、木の実やら何やらを集めていた。
そして、洋介から１つポイントについて提案が出される。最低限１２０ポイントを目指すというもの。
内訳としては約１週間分の食料と水で１１０～１２０。仮設トイレで２０。男子用テント２つで２０。残りの３０～２０で必要不可欠な部分を補うというものだ。かなり理にかなっているし、無理もしてない。しかもある程度のポイントも稼げる。十分な内訳だ。
皆も説明を聞き、不満は無いようだ。それから話し合いは続き、川の水を飲むようにするなど出来るだけ我慢が必要だということも気づき始めたようだ。そして、その他補足で購入される。

ある程度話し合いが終わった頃、澪についての話が上がる。しかし、それもイケメン平田洋介が何とかDクラスの皆と澪を説得し、澪をDクラスで保護することになった。

あれから澪は俺と一切目を合わせようとはしなかったけど。

そんなこんなで1日目が終了する。

おっと、大切な事を忘れていたな。六助は早々にリタイアしたそうだ。

総合すると結構まとまっていると見える。それもクラスのまとめ役である洋介の力があってこそだろう。そして、サバイバル能力のある寛治の力もここで発揮された。落ちこぼれだの何だの言われているDクラスだが、そんな事は殆ど感じられない。個々の長所を活かしていければ苦境も乗り越えられるというものだ。

そう、俺は1人木に登り黄昏るのであった。

2日目

早朝、まだ皆起きるような時間ではない頃清隆が誰よりも早くテントから出てくる。そして、清隆はある1人のバッグをあさる。傍から見ると変態行為を見つけただけだが、違う。

「清隆」

仮に遠くから見ても分かるほどの驚き具合でこっちを向く。俺はニヤニヤして手を振った。顔面蒼白だ。面白い。

俺は降りて清隆の側まで行く。
「千里、これはだな…」
「分かってる。同じ事を考えてたな」
「…いつからだ」
最近言葉足らずだが、清隆はすぐに気づいてくれたみたいだ。今のだったらお互い澪を狙ってる変態共と捉えられても否定出来ない言葉だったな。
「何がってのは流石に気づかなかったが、澪が刺客だって事は最初から気づいていた。翔と対立して別れたと言ってたのも嘘だ。あいつの嘘をつく時の癖も見抜けた」
「…よくそこまで見抜けたものだ」
「よく言うぜ。お前も俺が言わずとも気づいてただろ」
「どうだろうな」
そう濁し、俺から顔を背けた。
わざとらしい。そこら辺で洋介も起きてきた。清隆と洋介で話している間俺は陽射しに照りつけられながら後の構想を考えるのであった。
８時を過ぎた頃
Ｃクラスの小宮と近藤が襲来してきて挑発して来たが、俺はそっちの方には行かず別の方に行くことにした。

「さてと、ここら辺だろうな」
独り言と共に現れた景色はトウモロコシ畑。船から見ていてある事は気づいていた。
「…先客がいたか」
「やあ、康平。俺が先に来てしまった」
「四月一日か、なるほど。邪魔したな」
「え!?葛城さん！せっかくの食料ですよ！」
「早い者勝ちというやつだ。悪かったな四月一日、気を悪くしないでくれ。弥彦も悪気があるわけじゃないんだ」
気にしないというふうなジェスチャーをしながら笑顔で手を振る。しかし、康平は無表情に弥彦は不満そうな顔しながらこの場を去っていった。
俺は1つの細工をしてからその場を去った。単独行動は褒められた事では無いだろうがこういう収穫はいいな。
２日目は特に問題という問題がなく過ぎていく。俺がトウモロコシ畑の事を話したのが夜だったため次の日に何人かで取りに行くことに決まった。そろそろ俺も皆とも仲が深まったようだ。俺が運動神経良かったり、ちょっとサバイバルに成通している事が判明しそれに関して聞きに来たりも多くなった。だからこそ、今後起こるであろう事は皆受け止められるかが気になるところだ。

そんな今日も俺は1人木に登って過ごすのであった。

捨身飼虎

3日目

特に問題という問題はなかった。皆でトウモロコシを取りに行ったという事だけだ。何人か張り紙について話していたのを聞いた。それは俺がやった事だと言ったら納得していた。

『この場、私有地なり、勝手な持ち出しを禁ずる』

簡単だが、効果は高いだろうな。なぜならスポットというシステムがあるため迂闊には手出しは出来ないからだ。

そして、4日目

とうとうCクラスはほとんどの生徒がリタイアした。それを見た俺はとある場所へと赴いた。

「やあ、帆波。調子はどうだ?」

Bクラスだ。一之瀬帆波を筆頭としたどのクラスよりも統率の取れたクラスだ。もちろん俺はこのクラスにも接触はしている。知り合い程度なら全員。連絡交換済みは半数近くだ。帆波は1番最初に連絡を貰った相手。

「あ、四月一日君！どうしたの？偵察？」
「ああ、Ｃクラスがほぼリタイアして、Ａクラスは完全封鎖地帯だからな。必然的に足が向いた」
「あはは…そうだよね。ほんとＣクラスには驚かされたよ」
「お前らもＣクラス１人抱えてんだろ。大変だろうけど気をつけろよ」
「あはは、大丈夫だよ。金田君がいるんだけど龍園君に追い出されたみたいで、こっちでも一生懸命働いてくれてるよ」
「…ま、お前がいいんならそれでいいか。皆納得してるようだし…邪魔したな」
「うん、またね。四月一日君」
帆波は相変わらずだった。Ｃクラス金田悟はＣクラスの中でもトップクラスの学力を持つキレものだ。恐らくだが、この作戦もあいつが１枚噛んでいる可能性が高いだろうな。
夜、俺は恵と洋介に接触した。なんてことは無いただの状況の確認をしていただけだったけど。洋介曰く、誰からも不満の声が上がっていないそうだ。それに助長するように恵も女子からの不満はないと言っていた。
どうやら、洋介の目的は果たしているようだ。皆との絆は深まっている。
そして、深夜

俺はいつもと違い木の上にはいなかった。全員がテントに入った後、懐中電灯を1つ借りて夜の森を散策する。
理由は簡単だ。暇だったから、薪拾いや木の実集めをするためだ。俺は超夜型のショートスリーパーのため、むしろ夜の方が動きたくなる。
そんな衝動に駆られた俺は4日目の夜中、正確には5日目の夜中に出かけたのだ。
ただ、その行動が軽率というものだった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
つまり、俺が今この状況に陥っているのは完全なる自業自得のなせる業だ。
いや、そんな誇らしげに言うことじゃないな。今なら3歳児にすら喧嘩で負けそうなレベルまで俺は下がっている。大きなハンディキャップを背負っているためだ。
そんな事を（何もしていない）している内に、体感で約4時間は経った。だから現在は午前3時〜4時辺りだろう。
やることも無い。というよりやれる事が無いと言った方が正しい。少しだけけもの道から外れた所にいたのを戻ったはいいが、ここからはどちらが来た道か分からない。
生憎と足跡すらもぐちゃぐちゃになってしまった。
約体感1時間半経過
少しだけ、陽射しの存在が体温を通じて分かってきた。視界も少しだけ白が強くなっ

た。だから恐らく4時～5時半の間だ。すると、ザッザッっと足音が聞こえる。
その足音は徐々に徐々に俺の方に近づいてくる。まるで、俺の存在が、そこにいるという事が分かっているかのように。
その足音は俺の目の前で止まる。俺の視界にもぼやけたシルエットが黒く映し出される。
「そろそろだと思っていたよ」
「……」
その人物は無言だった。息遣いの音すら聞こえないほどだ。
その人物は俺の手を引き、案内するかのように先導して歩いていく。
「おいおい、少しは気を遣ってくれ。すげぇコケるんだけど」
「……」
「悪かったよ。こんな朝早くに起こさせて俺の事を探させる何て事させたは謝る。だから機嫌直してくれよ」
俺は一呼吸置いて、その人物の名前を呼んだ。
「なあ、恵」
「……はぁ……」
恵はため息と共に足を止めた。凄くダルそうだ。

「ほんと、意味わかんないんだけど。何?あの命令」
俺は昨日恵と洋介と話した時、恵にだけ1枚紙を渡していた。それには『朝5時に起きて俺の事を探せ。印は残しておく』と書いていた。
「何、餌を撒いてたんだよ」
「餌?」
「まあ、皆が起きる頃鞄を漁れば分かることだ」
「……あんたの言ってることはほとんど訳がわかんない」
「安心しろ、悪いようにはしない」
「ふん」
少しだけ機嫌を損ねたようだ。また、乱暴に歩き始めた。おっと、またコケた。
「はぁ…久しぶりに感じたよ。恵」
「何が」
すげぇ適当に聞いてくるんだけど…優しいのか優しくないのか微妙過ぎる。
「久しぶりに、暗闇で寂しいと感じたよ。それで、そんな中で手を握られて、温かいと感じた」
「…あんた、大丈夫なの?その…風邪とか引いてない?手、めちゃくちゃ冷たいし」
「何?心配してくれてる感じか?」

「ち、違うし!!これは風邪引いてリタイアとかされたらポイントが下がるって事!!」
「ふっ…」
「笑うな!!」
「悪い悪い。素直に嬉しいぜ。来てくれたことも心配してくれてる事も」
「だから……はぁ…もういい。で、どっからが嘘?」
「何を言う、最初から俺は本当の事しか言ってないぜ?」
乾いた、しらけ切った笑いを恵は出す頃には拠点までついた。それからは恵に俺のバッグから予備の眼鏡を出してもらい。装着する。それからは恵がテントに戻ったのを見てから俺も木に登った。
少し経った頃
女子のざわめき声と男子の気だるそうな声と共に俺は木から降りた。
「どうかした?」
「あ、平田君…平田君には関係ない話なんだけど……実は軽井沢さんの下着が盗まれたの」
狙い通りだ。
それから男子は抗議するもひとまず荷物チェックをする事になった。
もちろんのこと俺のバッグの中には入っていなかったが。

「ば、ち、違えし!!」
　どうやら寛治のバッグから出てきたようだ。寛治と春樹が言い合っていると寛治が下着を清隆に押し付けていた。渋々受け取った清隆。
「清隆」
「ち」
「安心しろ見てた。これに入れろ」
　俺が渡したのは簡易トイレで使われる給水ポリマーシート。
「俺が罪を被ろう」
「だけどお前」
「急ぐぞ、お前まで怪しまれる」
　そう言って俺は先に皆の元へと向かう。
「それでどうだったの?」
「だから!俺らは!」
「ごめん!みんな!」
　この一言に皆の視線が全て俺に集約される。
「犯人は俺なんだ」
　俺はそう言って深々と頭を下げた。

「嘘っ!!?」「はぁ!?」「何で四月一日君が?!」「信じられない!!」

俺は頭を下げたまま話した。

「最初は悪ふざけ、ただのイタズラのつもりだったんだ。いつ気づくかとか、どんな反応をするかとか。そして、これをやって皆どう動くかとかそんな感じだった。別に恵を恨んでるとか、恵に特別な想いがあるとかじゃないんだ。でも、やってみて凄い後悔してる。皆がクラス内でバラバラになりそうになったり、喧嘩しそうだったり…何より、恵の事をとても傷つけた事を後悔してる。正直謝って許される事かは分からないでも、後で個別に恵には謝る。もちろん俺だけじゃ恵も不安だろうから洋介となんなら清隆とも一緒に付いてきてもらう。もちろん下着には何もしていない。袋に包まってあるだけだ」

このお陰でこの場は終息された。流石の俺も息が詰まる。寛治には死ぬほど感謝された。

そして、宣言通り俺と清隆と洋介と恵が拠点から離れた場所にいる。

「先に言っておくが、違うからな」

「ふん!」

「軽井沢さん…四月一日君も最初からそんな事言わなくても」

「まあ、千里が犯人じゃ無いってのは本当だ。下着は最初池の鞄に入っていた」

「え!?じゃあ」
「それも違う。寛治も犯人じゃない」
「そんなのわかんないじゃん!!男ってケダモノじゃん!!」
「言っておくがな、恵。女の方が子孫を残したがってるから性欲は女の方が強いから女の方がケダモノだぞ」
「嘘?!」
「知らん、適当言った」
「もう!真面目に話してよ!!あたしは被害者なんだけど!」
「結論を言うなら犯人は澪だ」
「え?!」
「俺は毎日拠点を見渡せる木に登って夜を過ごしている」
「何してんのあんた…」
「理由は監視だ。案の定毎夜澪は夜中テントから出て機会を伺っていた。それに餌を撒いてた」
「餌ってこれの事」
「そうだ。そして、食い付いた」
「じゃあ何で庇うような真似したわけ?突きつければいいじゃない」

「あの場で言っても通るはずがないし、証拠もない。それにますますクラスの仲が悪くなる一方だ。あの場ではああするのが一番だったんだよ」
「本当に四月一日君には感謝しているよ。あのままだとどうなってたか」
「まあ、クラスはバラバラになってただろうな」
「清隆の言う通りだ。そんなのは恵的にも嫌だろう？だから汚れ役が必要なんだ。しかも嘘を平気でつけて、それを信じ込ませられるような奴が」
「だからって…あんたが傷つくだけじゃん」
「そこはお前と洋介の仕事だ。何とかして俺の事を取り持ってくれ。まあ、少しだけ印象が変わるだけだから問題ないけどな」
　そこで解散になった。
　このままだったら、やられっぱなしの奴だからな。まあ、一矢は報いてやるとするか。本当は動きたくないけどな。
　6日目
　俺はこの日初めてテントに入った。理由としては昨夜雨が降ったからだ。雨があがった早朝俺は静かにテントを出ると清隆の悲鳴が聞こえた。南無三、清隆。
　6日目にもなると少し焦りと余裕が混ざってくる。しかし、動き自体は慣れたようで皆魚釣りも木の実や果物探しもある程度できるようになる。俺も1日でどうにかなる

ようなものでもないが、雰囲気は悪くは無い程度には俺の印象も上がった。恵と洋介のお陰だろう。感謝感謝

事件が起きた。仮設トイレの裏側、マニュアルが燃やされるという事件。皆で消火活動に勤しむ中、珍しく洋介は俯いて動かずにいた。

ぼそぼそ呟き声が聞こえる。

「どうして…どうしてこんな事が…」

無理もない、この数日間仲良くもなったが、後半で事件が起きている。洋介にしてみれば皆仲良く出来ていなくなってしまう。つまり、友情の崩壊。洋介のトラウマだ。

今も男子と女子の言い争いが行われている。

「…雨も降り始めたか」

この雨の対策を洋介に聞こうと寛治は話しかける。しかし、洋介はこれに反応しない。近くにいた清隆が話してから気づいたようだ。それからは急いで指示を出していた。何とか脱したようだ。それを確認してから俺は堀北達が向かっていった方向にゆっくりと向かっていった。

狂言綺語

段々と雨が強くなる。次第には本降りになり、徐々に徐々に体温を奪っていく。
辺りも暗くなる。正直夜の雨の中の行動は俺にとってかなり厳しい環境だ。ただでさえ目が悪く、暗闇が見えずらいことに加え水滴で眼鏡の機能が下がる。
など愚痴愚痴と心の愚痴を零しているあいだに目的地についた。そこではもう既に決着がついていた。
俺はバレないように静かに木の上に登り、簡単には気づかれないように息を潜めながら様子を伺った。
暗闇だが、シルエットからでも何となく判別はついた。立っているのは澪だ。つまり、堀北は敗れ今まさに倒れている。
そこへ、予想外……いや、予想通りAクラス葛城康平、Cクラス龍園翔が姿を現した。どうやらDクラスのキーカードを見るために来たようだ。
(…とてもとても好都合。作戦は決まった)
さっきから思ってたが、流石に距離の問題と雨音で会話が聞こえない。口元が見えないのだから読唇術も使えない。まあ、推測するなら協力関係どうのこうのって感じだろ

うな。あまり、聞かなくても今はいいだろう。
しばらくして、堀北を残し去っていった。本当なら追って最終確認のために跡をつけるのも手だったが、やるべき事が増えた。
堀北の元に清隆が来た。来ること自体は予想したいたはずなのに何故か、それを見るまで俺は確信すること、考え自体を失念していた。そこで俺は接触することにした。
「清隆」
「千里か、よくここに来れたな」
「後を追ってきた」
「そうか、堀北だが」
「考えがあるんだろ？聞かせてくれ」
俺はそう言って、清隆が抱き抱えている現在意識を失っている堀北の目と頸動脈を数秒抑えた。
「これで最低でも３０分は目は覚まさないだろう。心置き無く２人で話そう。もちろん運びながらな」
「手慣れているな」
「まあな、形式を変えた方がいいな。俺が質問していく形式にする。
マニュアルを燃やしたのはお前か？」

「そうだ」
「理由は澪をわざと逃げるように仕向けた。そして、それを堀北が追うことも想定していた。
　そして、堀北が体調不良なのはいつから知っていた？」
「船から降りる時だ」
「それで、お前は体調不良で堀北がリタイアするのを見越して本当はお前からでも堀北を推してリーダーにさせようとしたが、運よくなのか自然と堀北がリーダーとなった。だが、予想以上に堀北は粘った。だから体調を崩すように仕向けた、それに加えてこの現状だ。何もかもお前の思い通りに動いたってわけだ。違うか？」
「いや、お前の言った通りだ」
「そろそろ着くか…最後に１つだけ聞くか……前にも言ったが清隆にとって俺は使える人間か？」
「…前まではお前も有用な駒の１つとして考えていた。だが、今では俺ですらお前の実力は測り知れない」
「つまり？」
「確かにお前は優秀だ。天才とも言える。でも、今のところお前を使おうとは思えない。今回だってほとんど俺との接触が少ない中で俺の考えをほとんど読み当てた。

…俺からも質問させろ。お前はいったいどうやってそうなった?」
「いつかは聞かれると思っていた…率直に言うのなら時代がそうさせたと言うべきか、裏から生まれたと言うべきか」
「どういうことだ」
「この国は他国に比べれば確かに安全だ。戦争も内乱もない。銃刀法何てものもある程だ。だけどな、どんなものにも裏側、闇の部分ってものがあるものだ。そんな所で生き抜くには中途半端ではダメなんだ」
「………」
「それに俺は天才なんかじゃない…天才とは言わない。俺はただの精神が破綻した異常者だよ…
そろそろ戻る。お前の事は説明しておく」
俺はギリギリでみんなの元へと戻った。もちろん清隆は間に合わずにペナルティを喰らい。堀北もリタイアした。
~~~~~~
その日の夜の船上
俺は1人、もう大抵の生徒達が寝静まった頃。ベンチに深く座りボーッと真っ直ぐ水平線を見ていた。
~~~~~~

思い出されるのは結果発表時。結果は上からD、B、A、Cという順位だ。内容的には、全てのポイントを使い果たしたCクラスは最後にリーダー当てのボーナスポイントで勝とうとしていた。だが、それは失敗した。

龍園は冷酷で残忍という言葉が似合うような性格をしている。だがそれに加えて頭もキレる。故にただ失敗したという訳では無い。単に相手が悪かったのだ。

そこで俺は自然と瞼が降りていく。流石に1週間の疲れが来たようだ。ちょっとだけ頭が回らない。ただ、次の瞬間、俺の横に人が来て、俺の眼鏡に手をかけた。瞬間、目を開きその手を掴んだ。

「きゃっ!?」

短い悲鳴がする。よく顔を見るとそれは恵だった。

「恵だったか」

「びっくりした～、何なの！人がせっかく親切に…」

「悪かった…」

「…どうしたの？いつもの元気はどうしたのよ」

「うん、まあ…」

「なに？今回全然活躍出来てないから？」

「それは…」

「でも仕方ないんじゃないの？だってあの堀北さんだし」
「いや」
「よお、クズどもがこんな時間にこんなところで何盛ってんだ？」
通りかかったのは龍園翔。俺は虚ろな目を一瞬で戻し万人受けする笑顔を貼り付ける。
「翔じゃないか！君から声をかけられるなんて思わなかった！」
立ち上がり翔の真正面に移動する。
「あ？誰だてめぇ。クズが気安く話しかけんじゃねぇよ。黙って俺の質問に答えろ。誰だ」
「俺は四月一日千里だ。知っての通りDクラスに属している。しかし、翔も災難だったな。あんな奇策を用意していたのに堀北にやられるなんて」
「はっ、たまたま今回が上手くいったからって調子に乗らないことだな。本気になればお前らなんかすぐに殺せるんだからな。ま、ただ今は一時の幸運に感謝しておくことだな」
「ああ、そうだな。次も…また堀北に頼るとするよ」
「ククク、精々お前は楽に死ねるようにな」
翔は俺の横を通り過ぎておそらく自分の部屋へと戻っていった。翔の姿が消えるま

でそのままその背中を見送った。その後俺の陰に隠れている恵へと目を向ける。
「あたし、あいつ無理」
「なんだ? いじめられっ子センサーでも反応したか?」
「もう……でも、確かにそうかも。なんか体が震えるっていうか」
「恵の心配ももっともだが、今は安心していい。今のところは翔から俺達には目を向けられない。今は堀北にしか目がいってないからな。今のうちに休んでおこう」
「ん…」
「それと、ここ何日か後の堀北の意見には俺が賛同しない限りあまり乗り気にはならない方がいい」
「なんで? 堀北の言う通りにすればいいんじゃないの? 今回みたいに」
「理由は最低でも2つある。
　1つは翔が堀北の相手を徹底的にしてくる。それによって堀北は翔に完全に抑えられる。
　もう1つは今回の作戦は堀北が考えたものではない」
「どういう事?! だって、綾小路君が」
「お前だけに言うがあの作戦は俺が思いついた。それを最終的に清隆に伝えて動いてもらった」

「でも、前に自分の事はバレてもいいから自分でも動くって言ってなかった？」
「これも２つある。
　１つは堀北の成長を促すため」
「堀北さんの成長？」
「はっきりと言っておくがこのまま進めば堀北は、いやＤクラスは確実に翔によって負け続ける」
「なんで…そう言いきれるの？」
「堀北と翔の差ってなんだと思う？」
「差？うーん…でも勉強じゃ、多分堀北さんのが上よね？……あ、友達…じゃない、周りの仲間の数」
「正解。よくたどり着いたな褒めてやる」
「な、何よその上から目線！ムカつく！」
　その割には嬉しそうだなお前。
「今言った通り翔には思うように動かせる駒がしかもクラス単位でだ。それに比べて堀北はどうだ？おそらく動かせるのは５、６にん程度だ。しかも、それは堀北自身で動いて集めたものではない。清隆や桔梗が気を利かせて動いているにすぎない。つまり、堀北は１人で動いているに変わりない。２人が関わらなければ１人でも翔に挑む。故に

負ける。そして、何度か敗北を味わせる事で気づかせる。そうしなければこの先進む事はないさ、堀北もDクラスも」
「そっか…意外とクラスのこと考えてんだね」
「…これは、洋介や桔梗が好きそうな理由だ。確実性もあるからこの理由は強い。だが、もう1つの理由。場合によっては堀北を退学まで追い込むためだ」
「な、なんで!?意味わかんない！」
相当驚いているな。まあ、無理もないだろう。何も無ければただただ強力な戦力を失うのだから。
「恵、よく考えてみろ。すぐに頭で思った事を口に出さない方がいい、意味はわかっているだろ？」
ほんの少し、いや、正確にはちょっとだけ言い出しずらい事を躊躇ったように間が空いた後に口を開いた。
「…協力……しないから…？」
「正解だ。つまりはそういう事だ。クラスにとって害悪になりうるものは退場させたいからな」
「……」
恵は俺に不満と不安が入り交じった目で見てくる。

恵はよく俺にこの目をする。
「安心しろお前を切り離すことは今後ないさ」
「…なにそれ？告白？」
「どう捉えてもいいぞ？その言葉に全力で答えてやるから」
「誰があんたなんかの告白受けるもんですか！」
と、べーっと舌を出して部屋へと戻っていった。まあ、確かに恵を切り離すことは当分ないかな。保証はしないけどな。
さーてと、ここから翔はどう動いて堀北を狙ってくるかなー。楽しみだな。
それで、清隆はどうする？俺を頼ってもいいんだけどなー。でも、頼らないだろうね。きっと、次の試験はすぐに始まるよ。この船上でね。
ははっ、間違えてたら恥ずいな。
～～～

うん、ごめんね

「ダメじゃないか四月一日！」

すいませんでした。先生

でも

『俺の何がダメだったの？悪いことした？ううん。俺はただ…ただ教えられたように動いただけ。生きていただけなんだよ？それの何がダメだったの？ねえ、教えてよ……ああ、なんでみんな教えてくれないの？みんな俺の事が嫌いなの？いらないの？じゃあ、俺はなんで生きてるの？』

ははっ、下らない。気持ち悪い。何言ってんの？こんな事言ったことも思ったことも無いけど？本当はこうだけど？

「なら、正解を見せてよ」

天理人欲

無人島試験が終わった次の日から俺に対するみんなの目が変わった。そして、後ろ指を指されるようになった。もちろん非難的な意味合いでだ。
「ふむ…また1つ有名になってしまったか」
なんて独り言を呟いていると、前に洋介と恵が2人でテーブルに座って朝食を食べていた。あちらも気づいたようでこちらに手招きする。
「おはよう2人とも」
俺は空いている席へは座らずちょうど2人の間辺りに立つ。
……字面が悪いな。これでは何かテーブルに立ってるようだな…
「おはよう四月一日君。朝から気分を悪くするかも知れないけど」
「大丈夫だ。もう知ってる。あれだろ？無人島試験中の恵の下着窃盗事件。建前上俺が犯人だからな」
「でも、なんでこんなに広まってるの？もしかしてあのC組の？」
「まあ、可能性があるにはあるがそうとも言いきれない」
「なんで？」

「俺が知ってる澪はこの手のやり方は好まないってのと、澪自体そこまでの影響力はない」
「まあまあ、確かに四月一日君の件は気になるし早めに解決しなければならない事だけど」
　ここで俺は洋介に待ったをかける。
「洋介、それに恵。お前らに頼みがある」
　２人は俺の方を見て続きを促した。だから俺は少しだけ笑を零しながら言った。
「面白いからこのまま続けてみよう。だからこの間のように誤解を解くような行動はしなくてもいい」
　その言葉に洋介は不思議そうな、恵は気味悪そうな顔をした。
「それはどういう意図で？」
「犯人を泳がせるってのと、別にこのままでも苦にはならないからな。無駄に動くよりは何千倍も得だ」
「本当にそれでいいのかい？」
「洋介、お前は過去の事があるから心配する気持ちは察する。だけどな、こんなもの今日日小学生ですらやらないぞ？恵に同じような事がやられてみろ？鼻で笑って話のネタにされるだけだぞ？」

「はは、そうか。うん、そうだね」
洋介は笑った。恵は呆れた。ちなみに俺も笑った。
「まあ、俺は罪づくりな男だからな」
「あんたが言うと結構笑えないんだけど?」
確かに
「あ、あの!四月一日君!」
「「ん?」」
女子が、確かBクラスの子が話しかけてきた。
…ああ、これはあれか。
「えっと…わ、四月一日君って、し、し、下着を集めるのが趣味って…聞いて…」
違う
「も、もし…私ので良かったら!」
違うしやめろ
「落ち着いて?」
「は、はひ!」
そこで俺はイケメンに限るスマイルとイケメンに限る対応をして見ることにした。
「うん。確かに今その噂が流れているけど、俺にそんなに趣味はないよ。それに、仮に

あったとしても君がわざわざする事は無いよ。それはとてもとても悲しい事だよ」
「はふぅ…」
　ここで俺はその女子の肩に手を置き話を続ける。
「でも、その優しさという気持ちだけは受け取るよ。これで、今日の俺の気持ちは最高に近くなったよ。ありがとう。今度はまた別の事での気分を上がらせてくれ」
「は、はい～…」
　そう言ってその女子は離れていった。
「「……」」
「……罪づくりな男だからな」
「ほんとによ!!」
　シャレにならなくなった。
「はあ、いや別に普通に受け答えしても面白くないし可哀想とか思ってただけだぞ？下心はない」
「ふん、どうだかね！あたしの下着を盗むような奴の言うことが信じられるものですか！」
「掘り返すなよ。せっかく埋めたところなのに。こっちは犯人が分かってるんだから」
「あはは…うん、四月一日君の言った通り気にしない方がいいかもね。でも、僕に直接そ

の話をしてきたらその時は否定してもいいよね？」
「その程度ならいいぞ。実際考えてみたらさっきみたのが何度も続くようなのは疲れるからやめたいとまで思ってきたところだ。だが、建前上でも一応は犯人って事は忘れるなよ」
「その自称犯人と被害者が仲良くお喋りしてるのはどうかと思うけどね」
「あはは…それじゃあ、僕達はもう行くよ。四月一日君はこの後何かある？良ければ一緒に遊ばないかい？」
「残念ながら…」
「そうか、うん。それじゃあまた今度」
「ああ、また」
「後々刺されないように気をつけなさいよ」
「安心しろ罪だけは作り続けた男なんだからな」
「だからシャレにならないんだっての」
　さてと、２人と別れたことだしやる事だけやっておこうか。
　そう思いながら俺は携帯のメモ機能を確認して食堂施設を出ていった。
～～～

吹澪が歩いてくるのが見えた。
　あっち側も気づいたのか一瞬心底嫌そうな顔をしたあと無言で俺の隣を通り過ぎようとした。
「まあ待てよ澪。少しだけ時間をくれ」
「……」
　無言だったが足を止めてくれた。
「悪いな。今日から俺の無人島試験での事件の事が他クラスにも知られてるみたいなんだが…心当たりは？」
「…いい気味ね。個人的にあんたなんて速攻ここから立ち去って欲しいからね」
「お前じゃないのか？」
「さあ？でも、考える必要なんてないんじゃない？だってあの場にいたのはあんたのところのDクラスとCクラスの私だけだったわけだし」
　ふむ、なるほどなるほど
「そうだな…そうやって曖昧にした方がいいよな。変にボロも出さないしな」
「は？何言って…」
「言っておくが俺は最初から分かってるよ。お前がこの事件の話を流してないってな」
「どっからその自信が出てくるのやら。あの中でどう見ても怪しいのは私でしょ」

「まあ、そうだな。実際下着窃盗事件の犯人はお前だしな」
「……」
「無言は肯定として受け取っておく。ついでに言うと最初っから俺達Dクラスに紛れ込んで俺たちのリーダーを知る目的にも気づいていたし、あの消えていった後翔と康平と落ち合っていたのも見た」
「あんた…どこまで」
「途中までは自然に溶け込んでいたさ、普通の生徒から見たらな。悪かったな俺みたいな変な生徒がいて。わざわざ毎夜遅くにテントを抜け出して機会を伺っていたのにな。それで、俺のまいた餌にも食いついてくれて」
「私は…あんたの掌の上で踊らされてたって言うの？それじゃあ、最後の作戦って…」
「ああ、堀北って事になっているが実際は俺が指示していた」
「…そう、それで話は終わり？帰らせてもらうけど」
「ああ、そうだよな。早くそのポケットに忍ばせてる携帯に録音したこの話を早く翔に報告しなくちゃならないからな」
「…っ!?」
「あんまり反応を表に出すなよ。足をすくわれるぜ？」
「あんた……何者なの……普段と全然違うし……口調も…これが素ってわけ？」

「……なんてな。んなわけないだろ？これは堀北に言われてこういう風のキャラで話しかけろって言われただけだ。だからこそ、俺も録音している」

そう言って俺は携帯画面を見せる。

「でも、手強いな澪は全然ボロを出さないし。俺これでも中学は演劇部でエース張ってたんだけどなぁ…迫真的な演技ですってよく褒められたんだけどなぁ…」

「……帰る」

「悪かったな。少しだけ長話しちまって」

澪は無言でその場を立ち去った。俺は昨日の翔の時のように見えなくなるまで背中を見送った。その後録音したさっきの話を削除した。

「さてと…澪はこれを報告するかな？」

十中八九報告しない。お互い背を向けての話だった。そのため俺の表情は読み取れないから。声質もどれが嘘かを悟らせないように作為してある。それは澪レベルなら録音したものを確認しなくても分かっている。

ただ、だからこそ報告する場合もある。でも、それは上手く録音できていた場合だ。俺がなぜこの自販機が並ぶ空間を選んだ思う？

通る可能性が高いから？惜しいな。正解は、ここは波音と機械の駆動音が大きい。それに俺の声もそこまで大きくないし少しだけ離れている。仮に聞こえてもそれは断片

的だ。完全に聞き取ることは出来ない。ましてやポケットに入っていた携帯だ。
…また、やってしまったな。実際この行動に意味は無い。単なる暇つぶしだ。その割には少しだけ危ない橋を渡っている。
だから、俺は…だからこそ俺は俺として生きてるのかもしれないな。
～～～

「はあ？てめぇいい加減舐めるのも大概にしろよ？ガキだからってこっちが手加減すると思ってんのか？舐めてんじゃねぇぞ!!」
「でも…聞こえてきませんか？この音を」
「は？何を言って……まさかてめぇ!!!?」
そう、聞こえてくるのはパトカーのサイレン音。
そこから俺はその男に詰め寄られ、胸ぐらを掴まれる。その直後だ。
「そこの男！すぐにその子から手を離しなさい!!」
警察官が入ってきて男を取り押さえた。
「離せ！離しやがれ!!このガキが!!!殺してやる！ぶっ殺してやる!!!!!」
「大人しくしろ!!」
「大丈夫かい？君、怪我はしてないかい？」
「う…うん…大丈夫……です……でも…」
「大丈夫だ。安心していい。悪い人はもう捕まえた」
「この匂い……お前薬物をやっているな!?」
「はぁ!?何言ってんだ!!!俺は薬なんてやってねぇ!!!変な言いがかりつけんじゃねーよ!!」
「話は署で聞く。大人しく付いてこい」

「その前にそいつを殺させろ!!そいつはただのガキじゃねぇ!!悪魔だ!!騙されるじゃねぇ!!」
「君はここに住んでいるの?お父さんとお母さんは?」
「ここ…従兄弟の家なの。今は誰もいなくて…僕は留守番だったの…そしてたら…」
「そっか、それは大変だったね。それじゃあこの家の人が帰ってきたら連絡ちょうだい。名前は?」
「安藤　健人」
それで犯人は捕まった。
そう、確かに男は今まで薬物はやってなかった。じゃあ何故そうなったか?簡単だ。この男はこのアパートに住む。俺のところに来る前に少しだけ留守にしていた。その間に侵入し男の飲んでいた飲み物に薬物を溶かした。それも匂いで判断できるレベルでだ。
じゃあなぜ男は気づかなかったか?それは男の部屋はほとんどゴミ屋敷同然に臭かった。それに俺がいるこの部屋も別の意味で匂いがキツい部屋だからだ。それに頭に血が上りすぎて上手く頭が回ってなかったしな。味の点に関しては無味として有名な物だったからなその点に関しては気にしてない。
でも、飲んだ時点で感覚が変わるのが分からないのはおそらく俺に怒鳴り込んできた

理由の電話の最中に飲んでたのかもな。
それにしても悪魔か……うん、悪くない響きだ。それに、あながち間違いじゃないかもだしね。
それからすぐに俺はその場から姿を消した。警察からの事情聴取を受けるのも面倒だしな。

天花乱墜

ある日、道端で車に轢かれて死んでいる猫を見つけた。普段なら即座にスルーするんだが、最近の事を思い出して俺は吹き出した。

面白いよな、人間って生き物は。どれだけ人気があってついこの間までチヤホヤとされてても何か1つでも粗を見つければそこにつけこんでくる。

（お前も俺と同じなんだな）

よく動物に同情するのは良くない。でもこれはだっ同情ではないだろうな哀れみなのだから。

だからという訳では無いがこれから卒業式へと赴く俺の考えを変化させた。

これがその学校全てを地獄と化した事件のきっかけだった。

そんな事がきっかけだった。

〜〜〜

「さっきの…どういうことなの？」
　聞きたいのも最もだよな。
「さっきのってのは？」
　というわけでとぼけてみた
「とぼけないで。悪いけどさっきの会話聞かせてもらったわ、どうして自分が優待者だとバラしたの!?」
「盗み聞きか？良い趣味してるな」
「いいから答えなさい！あなたはどんな事をしたか分かっているの?!」
「ああ、分かっている。分かっている上で聞きたいがお前は今回の試験の本質…いや、違うな、全部の組の全部の優待者は分かったか？」
「質問をしているのは私よ」
「まあ、落ち着けよ。お前もしかして何か茶柱先生に聞いたんじゃないか？」
「…ええ、聞いたわ。あなたの編入試験の結果をね」
「ふーん。まあ、個人情報どうのとかは気にしないけど…」
「筆記試験は全科目満点、体力テストもただ1つを除きどのスポーツのエースを軽々と抜き去る程の実力を持ち、判断力協調性においても優れている。
　と、茶柱先生からは聞いているわ」

「ははっ、めちゃくちゃ褒めらたな」
「これを踏まえた上で茶柱先生は私にこう言ったわ
『綾小路とは言い方を変えるぞ。堀北、四月一日はお前よりも優秀だ』と」
「ふーん…それで？」
「確かに聞いた限りでは私よりも、いいえ、この学校の誰よりも優秀かもしれないわ。でも、私は信じてないわ。私は私がこの目で見たものしか信じない」
「……」
絶句した。ああ、今まで短い人生を生きていたけどその中で最長の長さ絶句した。
「ふ…ふふ、ははは、あははは!!」
人間は不愉快を通り越すと愉快になるらしい。初めて知った。
いや、しかし、俺は馬鹿にされることに関しては全然気にしないでタイプ何だけどな。何故だろうな、この堀北鈴音に関してはどうしても苛立ってしまう。
…多分挑発的な行為、言動だとは思うんだけどなぁ…乗るか？俺のストレス発散も兼ねて。
「黙ったり、笑ったり忙しいわね」
「いやなに…俺は随分とお前に見下されているだなと思ったら笑えてきたんだよ」
「……」

ここで俺の思考は『この場での堀北鈴音からやり過ごす』から『堀北鈴音を徹底的に叩き潰してみる』に変わった。
「さっきも聞いたが、全部の組の全部の優待者を堀北は知ってるか？」
「…いいえ、でもそれは他の生徒も同じ」
「俺は全員知っている」
「え…？」
「もちろん法則性も導き出した。とある1人に自分が優待者だと聞いてからな」
「…嘘ね」
「その回答を押し通すつもりならお前は地の底に堕ちることになるが？」
「何が言いたいの？はっきり言ったらどう？」
目に見えて堀北の期限は悪くなる。
「まあ、いい。次に無人島試験。
あの最後の作戦考えたのは？一応お前ってことにはなっているが？」
「あれは…私ではないわ」
「そうだろうな。なぜならあれを考えたのは俺なんだからな」
「それこそ嘘よ！あれは、綾小路君が」
「俺が清隆に指示して動かした。なぜ清隆にしたかは特に理由はない。ただその時近く

にいたからだ」
「でも…」
「…なあ、堀北。あの時のお前の作戦はなんだ？何がしたかったのか俺には理解できないんだが？」
「……」
「澪が来た後何か澪と接触したか？澪が無線機を持っていた事を知っていたか？澪がカメラを持っていた事を知っていたか？最後の澪を追ったあとの事を考えていたのか？どうだ？お前は知らない奴から見ればＤクラスを勝利に導いた優等生だが、俺のように知っている奴から見ればあの時のお前は足を引っ張った邪魔者以外の何者でもない」
「そんな……」
堀北は唇を噛み締め、苦悶と悔しさ、悲しみと憎悪を俺に向けた。
愉悦
「分かったか？堀北。これが俺とお前との差だ」
「あなたは…何が目的なの？」
俺はその問にいつもの万人受けする笑顔をした。
「はは、決まっているだろ堀北。Ａクラスになる事だ。ただ勘違いはするな、誰の為でもないこの俺自身のためだ。最悪過程は関係ない、最終的に俺がＡクラスに入り決められ

た将来をつかみ取ればそれでいい」
「なんて事を…あなた、最低よ！」
「ああ、俺もそう思う。だからそうならないようにどうにかしろ。俺のみに頼っていたらクラスは崩壊するぞ？それに、俺の邪魔をするようならお前の言葉を受け付けない。ただ、話を聞かないというわけでないから安心しろ」
「…分かっているわ。今の話を聞いて私はあなたの力は借りない…自分の力で」
「…堀北。これだけは言っておくけど人間なんて弱い生き物は1人じゃ生きていけないぞ？お前はそこら辺を勘違いしている。1人でなんて出来るわけがない、俺だって力を借りるのだからな」
「…」
「洋介からの協力にも応えてやった方がいい。保守的な考えだが、クラスの事を誰よりも考えている。それに人望もある。洋介と協力的になれば、洋介の力で他のクラスメイトの力も借りられるからな」
　俺は堀北を残し、その場を去ってから携帯でメールを打ち送信した。その瞬間携帯にメールが届いた。
『子グループの試験が終了いたしました。子グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動して下さい』

終了だ。さてと、おや？今読んでいるあなた。不思議ですよね？なんでこんな所から始まっているのか。

そうだよね。不思議だ。俺もそう思う。でも、仕方ないんだ。だって俺の試験はもう終わったんだから何も面白くない。

あ、でもそう言えば話してなかったね。堀北が聞いた会合での話。いい機会だからその話を聞かせてあげるよ。

～～～

４つめは、試験終了前に答えて不正解だった場合回答者のクラスのクラスポイントを失い、優待者のクラスなクラスポイントを、優待者本人にプラベートポイントを得られる。

そして俺は同じグループのＡクラスの生徒を呼び出した。

「四月一日、こんなところに呼び出して何のようだ？」

「いやなに、今回Ａクラスは翔に狙われているからなその忠告と１つ提案があってね」

「翔とは龍園か？それなら心配いらない、こっちには葛城さんがいる。余計なお世話だったな」

「まあまあ、本当に康平の力だけで勝ち上がれると信じているのか？」

「お前…葛城さんを馬鹿にしているのか!?」

「怒るなよ。知っているぞ？お前、実は康平の事を何一つとして信じてないだろ？坂柳派の君ならね」

「…どうしてその事を知っている？」

「俺に知らないことはないんだぜ？それで、提案は聞くか？」

「…聞くだけ聞いてみよう」

「…まあ、いいか。この情報を聞くにはポイントを貰うが？」

「参考までに幾らか聞いておこう」

「５０万ポイントだ」
「はっ、バカバカしいな。誰がそんな高額な買い物をするものか、断らせてもらう」
「本当にそれでいいのか？」
「何が言いたい」
「この情報でお前は確実にこの試験に勝利することが出来る」
「…優待者が分かったのか?!」
「ああ、そうだ。どうだ？確かにこの取引ではお前に得は少ないかもしれないが、結果だけ見るならお前は勝ちを得ている。クラス内でも優位に立てるぞ？」
「…葛城さんに相談させてもらえるか？」
「いや、今ここで決断しなければこの話はなしだ」
「そんな…しかし…」
「まあ、確かにいきなりこんなことを言われて、しかも５０万払えなんて出来るわけないよな。だから、前金で１割の５万を払ってもらう。それでお前が俺の情報で優待者を当てることが出来たら約束通りの残りの４５万を渡してもらう。もし、その前に誰かが裏切り試験が終了した場合には残りは払わなくても良い。どうだ？」
「確かに俺にとっては悪くない…」
「１つ、条件としては解答するのは次の日の集まりが終わってからだ」

「本当にお前を信用していいんだな？」
「それはお前次第だぞ？それと、運次第ってのもあるしな。誰かが早まって答えるかもしれないしな。ただ、これを受けなければ俺はこの試験に勝つけどな」
「…分かった。払うよ」
　そして俺は前金として５万ポイント貰った。
「というわけで優待者だが……四月一日千里。俺が優待者だ」
「!?本当か!?」
「ああ、ほら。これが証拠だ」
　俺が見せたのは優待者に送信される優待者を示すメールを見せる。
「…本当のようだな」
「うん」
「……分かった。明日の集まりの後でいいんだな？」
「うん」
　それからその生徒は無言で俺の元を立ち去った。
　～～～

を似せて作った偽物だ。

まさか、Aクラスの生徒が引っかかるとはね。どうだったのかな？今回は割と簡単なシナリオだったからバレると思ったからな。

良かった良かった。ちゃんと約束を守るようなやつで。

ごめんね。これが俺の本職なんだよね。

名詮自性

試験終了のメールが届いてから少しした後恵から着信が来る。
「どうかしたか？」
『どうかしたかじゃないわよ！あんたのグループの試験終了のメールが届いたんだけどどういうことなの?!』
「簡単な話だ。俺が終わらせた」
『え…？じゃあ、あんたは優待者が誰か分かったってこと？』
「ああ、お前から優待者である事を聞いた後から法則性を導き出した」
『はあ!?それだけで全部分かったわけ?!』
「少し足りないか、洋介からＤクラスの他の優待者も聞いた。それで確信に至ったって感じだ」
『凄すぎでしょ…』
「まあ、それはいいとしてだ。お前の方はどうだ？」
『どうもこうも最悪よ！人は最悪だし！Ｃクラスの女子は何か突っかかってくるし！』
「ふーん…そうだな。俺も洋介もいないんじゃ保護のしようもないからな、誰か何とな

く人気そうな男子にでも媚でも売っておけ、それが誰かに邪魔…うーん、違うな喧嘩？しそうになっても続けろ」

『え～…』

「文句言うなよ。組み分けはどうにもならないし、他の組にも干渉できないんだから」

『ならあんたから誰かに頼んでよ』

「アホ、お前は自分から過去をバラすきか？それ以外の事なら出来る限りは守るから安心しろ。俺が何もしていない時に限るけどな」

『……最後の一言が無ければ完璧なんだけど？』

「その割には声色が嬉しそうだが？」

『嬉しくない!!じゃあ！また連絡するから！』

と言ってから一方的に通話は切られた。

ひとまずは恵は大丈夫そうだ。ただ今回は少し波乱が起きそうな予感がする。恵には悪いけど俺は俺でやるべき事をしなくてはならないからな。

～～～

すると真夜中の静かな空間に微かに人の声がする。音的に大声が反響して聞こえた感じだ。
「こんな真夜中に…喧嘩か？」
俺は何となく声のする方向へと歩いてみた。近づくにつれ誰の声かを何となく把握した。そして1人走り去っていく音がしたのでその走り去っていくやつに携帯で連絡してデッキに来るように伝えた。
少しだけ経ってからその人物が姿を現す。
そいつは無言で俺が座っている隣に座る。少しだけ暗闇でも分かる目元が少し赤い。
「どうしたよ恵。痴話喧嘩か？」
「ん…」
「はぁ…ほれ、何があったか話してみろ。この俺が聞いてやる」
「…ムカつく」
「洋介とは違うキャラにした方が話しやすいと思った俺の配慮だ」
「……私、Cクラスの子とちょっとゴタゴタがあってその友達が突っかかってきたの。それで私もムキになって突っかかったら軽い暴力されて脅された…」
「…それで？」
「それで…それを平田くんに相談しようと思って連絡したら綾小路くんと一緒に来たの

…それで私はこの事を話して守ってって言ったの。そしたら平田くんはそのCクラスの子たちと話し合おうって言って…でも、あの感じじゃ私の話は聞かないし、私だって今更謝るのは嫌だから…それで私も意地になって無理言って…それで…」
「それで、走って離れたと…ふーん…」
「これさ…あんたならなんてあたしに言ってた？どうやって解決しようとした？」
「…無理だな。お前の性格とかを考慮した場合これを穏便に済ませる事は無理だ」
「なにそれ…じゃあ私はどうすればいいのよ!!」
　恵は立ち上がって俺を涙目で睨んでくる。俺はそれに目だけ恵を捉える。
「恵、お前は少し勘違いしているぞ。これは明らかにお前が発端だ。それを洋介や俺に頼ること自体本当なら間違っている」
「あんたまで…もういい！助けてくれないなら!!」
「少し落ち着け、恵は確かに悪い。だが、全面的に恵だけの責任にはならない。なぜならお前とゴタゴタがあったのは別の人物だ。それを他の第三者、しかも被害者側の人物が割って入ったのは良くない。解決させるなら当事者同士で行うべきだからな」
「……」
「ただ、これでは洋介の話し合い案を採用することになるが、これでは恵は無理だ」
「……ん」

「ならばだ、何もしないのが１番だ」
「はぁ？それじゃああたしは…」
「なら謝るか？」
「…嫌」
「ならこれだろ。確かに相手方が何をするかは流石に予測は出来ない。何かあった場合それこそ俺を呼べばいい」
「……信用出来ない」
「それでいい。俺の言う事１００％を信じるな。２０％でいい、頭の片隅にでも置いておく程度でいい。俺にだって出来ることと出来ないことがある」
「でも前にあんたはあたしを守るって言った」
「お前は信じるのか信じないのかどっちなんだ」
「…ちゃんと助けに来てよ？」
「だから…分かった助けてやる」
　それを確認すると恵は部屋へと戻っていった。悪いな恵。どうやら俺はお前の約束を守れそうにない。
～～～

アで恵が虐められているからだ。
だが、俺はここで行くわけには行かなかった。なぜなら相手方を徹底的に叩き潰すためだ。
しばらくすると静かに扉が開かれる。そこから出てきたのは清隆だった。
「清隆!?」
「千里か、いると思ったよ」
「これは…まさかお前が?」
「…察しが付いているようだな」
「恵を手駒にするということか?」
「そういう事だ。そろそろ俺も動く必要があるからな」
「……理解した。なら真鍋志保たちは俺に任せてもらっていいか?」
「分かった。なら、画像を送っておく。好きに使ってくれ」
そう言って清隆は俺の脇を通る。
「随分と軽井沢に肩入れしているようだな」
「それはそうだ、大切な、大切な駒なんだから」
それを聞いてから清隆は少しだけここから離れた。それに続くように清隆とは別方向へと離れる。

またしばらくすると扉から人が出てくる。３人、４人か、その足音が段々と俺の方へと近づいてくる。うん、予想通り。

静かに俺がその進行方向へと歩いていくと、驚いたような声を出す。

「やあ、Ｃクラスの、こんな所でなにかしてたの？」

「あ、え?!わ、四月一日君!?嘘!?ど、どうして？」

「いやなに、俺のグループの試験が終わっちゃって暇だからね。見廻り？違うな…あ、探検かな？」

「そ、そうなんだ…それじゃあ私たちもう行くね。探検楽しんで」

「まあ、待てよ」

「「「!?」」」

「１つ話があるんだ。さっきからの挙動について言いたいことがね」

「わ、私たち急いでいるから…また!!」

「立ち去ってもいいが、いいのか？本当に」

その一言で走り出そうとした面々は動きを止め俺の方に振り返る。薄暗い空間に光り輝く携帯のディスプレイ。そしてその携帯を操作して映し出したこれまた薄暗い空間を映し出した先程まで彼女達が起こした出来事の一部始終。

「これ…なに？」

「な、な、なんで!?四月一日君が!?」
「もう少し上手い演技くらいしろよ。それに今聞いてんのは俺だ。答えやがれ」
いつもの有象無象達へと接した時とは違う、少しだけ本性を出したような口調で話す。
「ひっ!?」
「まあ、こっちとしては分かっているから聞かなくてもいいんだが…」
「どういうこと?!意味わかんない！」
「何を言う。簡単なことだろ?その場にいたんだから」
「なんで…」
「なんで?か…たまたまかな?」
「うそ…いや…」
「さてと…このままじゃ平行線か?このままなら、これの写真を先生に提出する。それなら最悪退学だな。それか、これを脅しにこれからの学校生活を過ごすかだな」
「嫌!!どっちも嫌!!」
「どちらも嫌か…随分とわがままだな。そうだな、ならば友達として俺から1つ提案がある。この写真、消してやろうか?」
「ほんとに!?」

その一言に４人は顔色を明るくした。予想通りすぎる、面白くない。
「だが、消した瞬間友達という枠組みは消え、完全に俺と敵となる。そうなれば俺はお前らを徹底的に叩き潰す。どんな手を使おうと、龍園翔と同じような手を使おうともだ」
「え…？いや…嘘？嘘でしょ?!何なの？あんた本当に四月一日君なの?!」
「質問をしているのは俺だ。答えを迫っているのも俺だ。早く答えろ。退学か、利用されるか、破滅するかだ」
「……」
４人は顔を見合わせる。そして、答えは利用される事を選んだ。俺はそれを聞いて満足した。なので、４人を帰す。ほとんど泣きながら１つ聞いてくる。
「何でこんなことをするの？」
「そうだな、クラスを上げるためってのもあるが、恵を虐めたからってのが大元だ」
「なんで…なんで四月一日君が軽井沢なんかのためにこんな事するの!?」
「たかが友達の分際で驕るなよ」
その一言に４人はひっ!?という小さい悲鳴をあげる。
「ああ、だめだな。ここに来てからどうやら俺は気が短くなったみたいだ。
だが、そういう事だ。お前らは所詮良くても友達、それに引き換え恵は俺の友達で仲間でありなおかつ保護対象だ。そんな相手と対等だとでも？はっ、笑わせるな」

「ほんと…誰よ…あんた……」

「……報告したければ翔にでも誰にでもしてみろ。したところでCクラス程度に俺に適う奴なんていないのだからな。まあ、報告したと分かればお前らはここには居ないだろうがな」

真鍋志保たち４人は逃げるように泣きながら走り去った。

「……俺は四月一日千里だよ。お前らの良く知らない、外の世界でもあまり見せていなかった本当の…俺の本質だ。ここならバレる心配はないからな。

もういないか…」

～～～

「どうして軽井沢を止めた？」
「まあまあ、いた所で問題ないでしょう？なら、ちょっといてもらっても大丈夫ですよね？」
「…お前らが今何をしていたのか気になるところではあるが、いいだろう」
「ありがとうございます。さて、本題に入りましょう先生はどうして俺を呼び出したんです？」
「聞いたところによるとお前は試験開始２日目にして優待者を全員把握したそうだな」
「ええ、まあ、正確には大体は１日目で目星はついてましたけどね。それがどうかしました？」
「私はお前の編入試験の結果を知っている。それに加えて今回の事もある。そして、協調性もあり向上心もあるように見えた。だから私は堀北や綾小路とは違い呼び出さずともＡクラスを目指すものだと思っていたが、私が耳にしたところお前は結果的に自分がＡクラスにいる事が目的らしいな」
　取り繕うか、素で話そうか悩むところだな。
「……どうでしょうね。どこからそんなことが出てきたかは聞かなくてもわかるとして、仮にそれが本当だとしてそんな事ほぼ全員が思ってる事じゃないですか？」
「そんだな。そうかもしれない。だが、お前はそうはいかないその力をＤクラスのため

に使い、クラスをＡクラスに上げて貰う」
「…随分と命令的ですね」
「私はお前の担任、生徒の行動の半分近くは無理矢理でも動かす事が出来るからな」
「それでも、それで俺が動くとお思いで？」
「そうだな…動いてもらわなければ私は困る。だが、動かなければお前は退学だ」
「な!?先生！」
　怒鳴る恵を俺は制した。
「退学ですか、それは一教師でどうこうなることですか？」
「ああ、私がお前の評価を書き換えればすぐにでも出来るぞ」
「退学……退学か……ふっ……ふふふ……ふはははははは!!!……いや…ははは、まさかこの俺にそんな脅しでくるなんて…そんな事とは…」
「…狂ったか？」
「７６３２万円」
「なに？」
「この額は俺が親に捨てられてから…つまり、小学６年生の時に稼いだ金です」
「「…は?!」」
「その次は１億と５０６万。

その次は１億と２３６２万。
その次は事故があったので少し少ないのと個人的な仕事があったので６２５８万。
とてもとても非現実的な数字でしょう？俺自身もどうしてこうなったのかよく分かってませんが…毎年確認するとこんな金額になってましてね」
「お得意のハッタリか？」
「ふむむ…まあ、俺が数えているわけじゃありませんが…」
「む？」
「いえ、何も…ハッタリ…そうですね。でも、先生なら知っているでしょう？俺がやったとされる事を」
「……」
「嘘つきだなんだと昔からよく言われてきましたけど…俺って自分から言ったことは確実にやり通してきたんですよ。
だから、俺は宣言しますよ。俺が退学した際にはこの学校の半分近くを同じく退学します」
「は!?ちょっと！何言って!!」
「笑えない冗談はここまでにしておけ、それにだ、ここから出た時後悔するのはお前の方だ。即刻お前の身柄を警察へと明け渡す。自分がやった罪がお前を追っている。この

学校にいる事がお前の安全装置だと」
「証拠は出せるんですか？」
「なにを…」
「証拠ですよ証拠。俺がやったと言われている事、俺がやったという証拠です。先生が言っていることは全て俺が面接の時、もしくは先生との面談の時に言っただけ。それに、先生達もその事件自体は知っていても誰がやったかまでは分かっていない。しかも、それは警察も同じ事」
「……貴様」
「ふふふ…わかりましたか？先生。足りないんですよ。俺を脅すには確実で、着実に、そして徹底的に殺す気で来なきゃ無理ですよ。
つまり…あなたじゃ枷が多すぎるって事ですよ」
俺は先生の横を通り抜け部屋へと戻ろうとする。
「あ、まあ、Dクラスが上がることに関しては俺的に別に良いので邪魔する気も何も無いので時には手伝ったりもしますよ。なので、先生は何もせずただ見てて下さいよ。俺が完膚なきまでに負けるまで」
部屋に戻る道中俺の体には1つの衝撃が走る。
その衝撃に足を止めてしまった。

「？どうしたのよ」
「…初動か」
「え？」
　それこそ俺の体に刻まれた完全なる弱点。
「何でもない。悪かったな今日は…」
「え…あ、ちょっと…」
　俺はその恵からの言葉を聞かず部屋へと戻った。
「くそっ…来やがったか…」

戦戦兢兢

「ただいま」
　静寂な世界はこの言葉でまたいつもの世界へと塗り替えられる。
「準備は出来ているか？」
　出来ている。いつもと同じようでいつもと違う。相手の望む、欲しているものを。
「お前はどうする？」
　これはいつも通り。あなたについて行く。喧騒鳴り止まない大都市だろうと、静寂が支配する地平線のみの荒野だろうと、力あるものが支配するスラムの街だろうと、私はあなたについて行く。
「そうか、そうかそうか…でもな、近々…約半年後、卒業してから俺が行くところはお前は行けない。ならどうする？」
　行けない？私があなたについていけない？
　寂しい、苦しい、悲しい、嫌だ、嫌だ、嫌だ。
「それからはお前一人で、俺の事を知られないように生きる。出来るか？」
「出来ない」

「そうか、ならどうするかを考えろ」
考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える、考える…
「考えた」
「ならそれを実行しろ。俺は止めないし、尊重してやるぞ。俺を楽しませて、騙して、殺してみろ。そうすれば俺は喜ぶぞ？なあ、ジャック」
あなたを楽しませられる？喜ばせられる？騙せる？殺せる？嬉しい、楽しい、愉しい。
「死ね」
～～～

そして唯一俺に背を向けているCクラス龍園翔。
「おまえが頭を下げて俺に頼むなら、「答え合わせをしてやってもいいんだぜ？」」
その翔の言葉に被せた俺の声に反応して翔は振り返る。
「てめぇは、この前夜中にそこの女と盛ってた奴じゃねぇか。何のつもりだ」
「いや、ははは…悪いね特に意味は無いさ。たまたまここを通ったら話し声が聞こえてね。それで、聞こえてきた内容を推察して翔が言いそうな言葉を選んでみたら見事にドンピシャだったって訳。凄くない?!」
この言葉を聞いて翔は露骨に不機嫌な表情をした。
ちなみに見ているDクラスの面々はポカンとしたような表情をしていた。あ、恵はちょっと怒ってそうな表情だな。
「あー、ごめんね。話の腰を折るような事をして俺はもう戻るよ。それじゃ、ごゆっくり」
俺は飄々と”いつも通り”の仕草、口調でその場を去った。
本当はもう少し遊んでいたかったが、あそこで俺がしばらく滞在していたら翔が本格的に俺に目をつけかねない。今はまだ堀北だけを標的にされていた方が何かと楽だ。
(ほんと…俺って嘘しかつかないな)
転入当初誰にでも目をつけられても問題ないとか思ってたがこの学校のシステムは

予想以上に厳しい。
…でもでも、こういう風なのが得意だし大好きなんだよね。逆境って言うの？そういうのがね。慣れてるし、ほんとにね。
「呼び出して悪かったな、桔梗」
あの場で翔の話を聞くのも実際は悪くはなかった。あれから何もせずに聞いていれば軽く喧嘩を売られるくらいで済んだと思う。俺は何もしなければちょっと調子に乗ってる洋介程度の認識だろうからな。
でも、あれは実際は恵への顔見せだったから直ぐに離れた。それに、ほら目の前にお客さんも呼んでたし。
「ううん、気にしないで。でも珍しいよね。四月一日君」
「ん？何がだ？」
「だって、あんまり四月一日君と喋ってなかったから私嫌われてるなかなって思ってたんだ」
「ははは、そんな訳ないさ俺は嫌う人間はいないからな」
「へぇ、ほんとに？」
「本当さ、連続殺人犯だって嫌わないさ」
「あはは、そこまで言うんだね。やっぱり四月一日君って面白いんだね。もっといっぱ

いお話すれば良かったよ」
「なに、まだまだこれから卒業まで長いんだ。これから話していけばいいさ、退学しなければの話だけどな」
「うーん、そうだね。どんなタイミングで退学になるかわからないもんね。うん、お互いそうならないように頑張ろうね！」
俺はその言葉に笑って返すだけだった。
この一連の会話の中での桔梗はいつも通り人好きされそうな顔で、笑顔で話していた。
さてさて、それがこれからどのように変化するかな？
「それで四月一日君はどうして私を呼んだの？」
来た。そろそろ来るだろうと思ってたタイミングだ。
今この場は誰もいない船首近くのデッキ。時間帯もまあまあといった所か。確実に人が来ないとは言えないが…まあ、良いだろう。来た所で困るのは俺じゃないんだから。
「ああ、それなんだが…ちょっとした世間話の1つ何だが…『ーー中学の学級崩壊』って知ってるか？」
「何？それ。ちょっと私詳しくなくてよく分からないな」

ふっ、流石だな桔梗。動揺も隙も少ない。
「そうだったか、でもまあもしかしたら内容を聞けば分かるかもしれないぞ？
確かブログだったか？その中で匿名の人物がその学級崩壊したクラスメイト全員の秘密とか悪口を書いて…それが原因だったか？」
「…へぇ、怖いね。その事件、でも何でその話を私に？」
もう少しだ。もう少しで…
俺は手すりにもたれかかりながら話を続けた。
「いや何…実を言うとあの中に俺の友人もいてね」
「!?」
「それで当時の話を聞いたんだよ。はは、凄まじかったらしいな。お前もそう思うだろ？なあ、犯人の櫛田桔梗」
目を向けたその先には先程までの櫛田桔梗はいなかった。そこにいるのはほとんどの人が知らない取り繕わない櫛田桔梗の姿だった。
「本性を現したか？」
「…なんで？」
「なんで、か。さっきも言ったろ友人に聞いたんだ」
「違う！そんな事を聞いているんじゃない！どうしてわざわざそれを言ったのかを聞い

てるの」
「ふーん、そっちか。なら教えてやるよ。俺とお前は”同じ”だからだよ。裏切り者の櫛田桔梗さん」
「っ!?」
この一言で完全に動揺した。余裕が無い、驚愕した表情。ああ、こういうのが俺は好きなんだ。
そして俺は桔梗の目の前、手を伸ばせば、足を伸ばせば全身に届く距離まで迫った。
「知ってるぜ。全てかどうかは知らないが、少なくとも自分が優待者である事を翔にばらした」
「なんで…」
「質問が多いな、桔梗。なんでもかんでも俺が説明すると思う」
「黙れ!」
その顔だ。余裕がない時に出るこの顔は誰でもある。こういう時ほど…
「…ふっ、まあいい、お前も晒したくもない本性を晒してんだ。それに見合った対価を払ってやるさ。
簡単な話だ。お前は目的がある。その目的のためにCクラスの翔と協力して行うため。俺たちDクラスのとある1人を退学させるための恩売りってところか?」

「……っ」
「どうだ？誰にもバレていないとでも？はは、まんまと騙されてるよな堀北も洋介も…」
その瞬間俺の右腕は掴まれ桔梗の胸へと押し当てられた。
「何が目的なの？」
今まで桔梗の口から聞いたことの無いような低い声が俺の耳に響く。
「目的？そうだな…お前の弱みを握るためだとしたら？」
「ふふふ…残念だったわね。これでもう無理よ。あなたの指紋はもう私の服にべっとり…ほんと男ってのはこういう時弱いわよね」
そう言って俺の右腕を離した。
「ほんとだな…」
そして俺は左手をポケットから出し持っていた端末を確認する。
「おお、よく撮れてるな。我ながらバッチリだ」
そう言って俺が見せたのは今の一部始終。桔梗が俺の手を掴んで自分で自分の胸に押し当てた映像だ。
「っ…!?
でも…指紋は残って」
「ああ、それなら…」

俺は右掌を見せてゆっくりとあるものを”剥がした”。
「え…」
「透明なゴム手袋のようなものだ。それを掌に覆うように付けていた。これだけで指紋なんて付きようがないさ」
一瞬の愉悦はその後のどん底の絶望を与えるのには効果覿面だったようだ。
そして即座に俺はさっきの映像を消した。
「…何がしたいの？」
「特に理由はないな。俺の個人的な趣味だ。あと、お前はどんなを手を使おうと俺には勝てないってのを刷り込ませる牽制か」
「狂ってる……あんたは一体何なの!!」
「…何なのか、か…そうだな。強いて一つだけ挙げるとするならお前と同じ事件を起こした犯人ってところか？」
「…同じ事件？」
「そうさ…お前は1つの学級を崩壊させたが…俺は学校”全てを崩壊”させた」
「学校…を…？」
「あぁ、卒業式の日にその学校に関すること、ほとんどの生徒と教師、それら全ての悪事やら秘密を卒業式会場はもちろん、その街全てに晒した。あとは簡単だ。

卒業式は崩壊、噂は噂を呼びそれがどんどんと肥大化、ほとんどの入学希望者は辞退、在校生も転入手続きを求め自殺するものも少なくなかったな」

これを聞いた桔梗は震えていた。恐怖していた。それはいつもの元気な人に好かれている桔梗でもなく、素を出し相手を見下し罠にはめるような桔梗でもなかった。

「く、狂ってるなんてものじゃない!!一体…一体なんの理由があってそんな…」

「理由？理由なんてないさ」

「は？…」

「理由なんてない。お前のように秘密がバレたとか、復讐のためとかは無い。

ああ、強いて言うなら道端に猫が死んでいたからかな。あれが無ければやっていなかったかもな。あんな面倒臭いこと」

人が1番恐怖を感じるのはどんな場面だと思う？圧倒的な戦力か？圧倒的な暴力か？

そんな奴も居るだろうな。否定はしない。哲学に正解が無いようにな。故に俺の持論を言おう。

「狂ってる…狂ってる狂ってる！あんたは…あんたは人殺しだ！悪魔だ！」

「知ってるさ。俺は天才じゃなく破綻者だ。自覚してる。

俺は悪魔だ。何度も言われ慣れてきた。

でもな桔梗、狂って悪魔にでもなるやつが居なければ正義の味方なんて現れないんだぜ？

この言葉覚えておけよ」

俺は桔梗に背を向けその場を立ち去った。

”絶対の恐怖は絶対の勝者の前にしか現れない”

『　　』

夢中説夢

私の世界には私とあの人しか存在しない。

まさに夢中説夢。

あの人に教えられた事のある言葉だ。

意味はありえない事というらしい。

夢の中で夢の話をするという意味から実体がなくうつろではかないものであるとも言うらしい。

私という存在そのものを示しているとも言っていた。

あの人には私がどう見えていたのだろう。

家族だろうか、体のいい道具だろうか、友達だろうか、邪魔な存在だろうか、恋人だろうか、敵だろうか、それとも自分自身だろうか。

私にとってのあの人は…

私にとっての四月一日千里とは…

『ジャック』にとっての四月一日千里とは…

四月一日千里にとっての四月一日千里とは…
四月一日千里にとっての『ジャック』とは…
自分にとっての自分とは…
全て…全てが同じであり、全てが違うのだろう…
故に…これこそが夢中説夢なのかもしれない。
～～～

でも、たまたま1度だけ見えた。話し終わって誰も見てない、あいつと話していた相手が目を離した後、一瞬…ちょっとの間だけ前に平田君と2人であいつの部屋に行った時に話している時とこの前茶柱先生と話している時と同じような…なんて言えばいいのかよく分からないけど、”いつも”とは違う表情をしていた…気がする。

ほんとにちょっとの間だったし、あたしもすぐに目を逸らしたから確信はない。

なぜか、見てはいけないような気がしてしまった。

思えば、綾小路君があたしを協力者にしようとした時の表情に似ていたような気がする。

そうだ、その事も言わなきゃない。仮にもあいつはあたしを守ると言った。今のところ守られたことなんて無いけど…

そして、今なぜあたしがあいつの事をこんなにも考えているか、それはあいつからメールが送られてきたからだ。

今までのメールへの返信かとちょっとだけ思ったけど内容は『水を6リットル買ってこい』だった。

これが来た瞬間リアルに『はぁ？』と声が出た。

何これ、まず命令口調なのがムカつく。何様のつもりよ。

それに意味がわからない。確かに水道水はあんまり飲みたくないけど、6リットルは

多過ぎない？と言うより女子にこんな重いもの頼む？普通。

こんな感じの事を返信したけど、全く返ってこないし。

今現在買って向かっているけどほんとに重い。暑いし、それに平田君以外の男子の部屋に入るのも立場上ほんとは嫌だ。

ただ、守ってもらうためには必要だし、言いたい事もいっぱいあるからしょうがなく行ってあげる。

さすがに直接なら話すでしょ。

そして、部屋に向かう。運良くホールにもエレベーターにも誰もいない。それに、あいつの階についてからも誰もいない。みんな休むために部屋にいるんだろう。あたしも早く休みたい。

あいつの部屋の前まで行って、インターフォンを押そうとした時声が聞こえた。あたしは慌てて周りを見た。

やばい、誰かいる?!そう思ったけど誰もいなかった。そして、また声が聞こえた。低く、唸っているような声だった。それは目の前の部屋から聞こえる。

あいつだ。あいつの声だ。

あたしはすぐに扉を開けようとした。でもすぐに思った。鍵は開いているのか？

でもそんな考えはすぐに消えた。扉が開いたからだ。

そしてすぐに目に飛び込んだのは頭を押さえて倒れているあいつの姿だった。
「ちょ、ちょっと!?大丈夫!?しっかりして！」
「ぁぁ…ぅ……くぅ…」
「大丈夫?!どうしたの?!」
「じ……ぅ…」
相変わらず頭を押さえて唸っている。突然の事すぎてよく分からない。
とりあえず寝かせた方が良いよね。幸いにもベッドのすぐ近くだし。
「動ける?ベッドで寝た方がいいよ。ほら肩貸してあげるから」
そうして、あたしは肩を貸してベッドに寝かせることに成功した。ちょっと重かった。
「う……ジャ……ック…」
「え?」
「ジャ…ック…」
「ジャック?誰?」
「水…」
「……わかった水ね」
ご所望通り買ってきた水を渡した。2リットルの飲料水。あたしの優しさでキャッ

プをとってあげた。
そしてそれを弱々しく受け取った。今まででは想像もつかないほどの弱々しさだった。
そして水は…2リットルあった水は一気になくなった。
飲み過ぎじゃない？
それからは唸り声が止まった。頭を押さえてたから頭痛が酷かったのか。それが治まったのか…寝息が聞こえる。寝たみたい。
眼鏡を外してあげた。前触った時は凄い勢いで腕を掴まれたけど、余程疲れたのか、それとも分からないほど弱ってたか、寝てたからかよく分からない。
四月一日千里。こいつの事は分からない事だらけだ。そしてまた1つ分からない事が増えた。
『ジャック』とは誰だろう。
～～～

今送っておくか」
　そうして俺はすぐさま端末を操作して恵へとポイントを送った。
　２万ポイントくらい。それを確認した恵。
「はぁ!?ちょ、おかしいでしょ！」
「何だ？嬉しくないのか？」
「嬉しいけど…２リットルの水３本何だから５、６００ポイント程度なんだけど」
「……」
　俺はそれを聞いてまた端末を操作した。
「ちょ、ちょっと！何でまたポイントを送ってるのよ！しかも…なんでこんなにポイント持ってんのよ!!」
　俺が送り付けたのは３０万ポイント。
　驚くのも無理はない。Ｄクラスで、ましてや転入してきて間もない俺が持ってる額では無いんだから。
「かなりコアなファンが結構いてな…１年どころか２年にも３年にもな。そんな奴らから色んなもんを貢がれるんだよ。食べ物やこの部屋にある雑貨や設備、そしてポイントをな」
「……はぁ？」

「だから無駄にポイントは持ってんだ。これくらいならまだ安い…いや足りないくらいと言っても過言ではないな」
「どういう事？だから、たかが水にいくら…」
「そのたかが水で俺は回復してる。もしかしたらこれが無かったら死んでたかもしれないんだぜ？」
「っ…そうかもしれないけど…でも…違うかもしれないじゃん。たまたまタイミングがよかっただけかもしれない。それに…死ぬなんて…」
「…確かにな、まあ、ぶっちゃけると水が無くても回復する。時間が経てば回復するものだからな。
　事故の後遺症での頭痛だ。かなりの痛みは伴うが死ぬ事はないし、俺は三日三晩…いや4日と8時間飲まず食わずでも死なない事は体験済みだしな」
「じゃあ…なんで…」
「詐欺師に借りは禁物なんだよ。あと売人としてもな」
「売人って…」
「詐欺師の仕事に飽きた時は売人としても仕事してんだよ。俺は。
　まあ、半分詐欺師の仕事も含んでいるけどな。注文された本物を渡した事なんて1度もねぇんだから」

「……」
「モノの価値は人それぞれだからな。俺は水に払ってない、お前への借りに金を払ってんだ」
　それから恵は無言になった。と思ったら。
「…あんたにとって…四月一日千里にとってあたしは何なの?!」
「……」
「前はあたしを守るって言ってたから、あたしはあんたの言う通りにしたし、信じてもいた。でも、実際のあんたは自分がしたいようにやっているだけ、あたしの事は1度も助けてなんかいない！船の時だって…あたしはあの後綾小路君にあたしの秘密を知られて、協力者にさせられた。あたしは…」
「俺にとってお前は何なのかって質問だったな。
　そうだな、クラスメイトであり仲間であり擁護対象であり…お前は俺だ」
「…は?」
「お前は俺なんだよ。自分を、自分自身を偽ってしか外に出られない。そんな生き方はやがて死ぬ。
　もちろん実際に死ぬって事じゃない。自分という存在が死ぬんだ。いずれは自分が何なのかも分からなくなる。

…お前にはそうはなって欲しくないんだよ。仮にお前がこういう奴じゃなければ強くは干渉しなかったと正直に言ってはおこう」

「……」

「どうだ、失望したか？けど現実なんてそんなもんだ。信じられるものなんていない。信じて騙されても勝手に信じた方が悪いんだよ。自分の力で強くならなきゃ自分は守れない。もちろん、腕力的なものだけじゃない。精神的な強さもな」

「ジャックって誰？」

「!?……何故それを？」

「唸っている時にうわ言で言ってたの」

「…お前はそれを聞いてどうする気だ？」

「…そうね。あんたの秘密として櫛田さんとかに教えて広めようかな。櫛田さんならすぐに広まるでしょ。まあ、これでどんな効果があるかはあたしには分からないけど…詐欺師は情報を漏らされるのが恥なんでしょ？」

「……ふっ、ふっふっふ、はははは…ああ、可笑しい、まさか俺を脅しにかかるとは…あー、やっぱりお前は面白い、やはりお前は機転が利いている。

お前を手放すなんて出来ない。俺から離れるな」

「は、は、はぁ!?」

「俺は今からお前に俺の秘密を全て話す。聞いたらお前は俺から逃れることは出来ない。これが表に出るまで俺の駒として動いてもらう。それでも良いのなら聞け。今ならこの部屋をすぐに出て聞かないという選択もできる。もちろん、聞かなかったからと言って守るという約束は必要最低限守る」

確かに伝えた救済措置、しかし、それでも恵は動かなかった。

あぁ…こいつは面白い奴だな。まったく…何故俺を信じられるのか…いや信じてないからこそなのかもしれないな、俺には真意は分からないけどな。

「まず前提としてジャックとは外国で俺が拾ったスラムの孤児だ。正確には拾ったと言うより選んだと言った方が正しいな。

理由としては俺の影武者として動かすため、俺の代わりに仕事をさせるため、俺と成り代わるためだ」

「そして…俺の秘密は…ーーーー」

〜〜〜

寤寐思服

「君、名前は？」
「……」
「君、名前は？」
「”お前ら”は何がしたい」
「君、名前は？」
「私達は確かに”ゴミ”だが、国ですらこんな事はしなかった。いや、こんな事にすら使用する時間がない、と言うより無意味な事だ。”ゴミ”である私でもわかる。
なぜだ？」
「君、名前は？」
「…機械か何かなのか？それともそれしか話せないのか”ゴミ”である私よりも能無しか？
はっ、所詮は子供か？少し考えたら分かるだろ。”ゴミ”なんだぜ？私は。名前なんてあるわけないだろ。ここに”いた”のは1秒後を生きることすら…自分の事しか頭にない奴らだ。名前があろうが無かろうが差は無い。それに私は親を知らない。どこ

ぞで生まれたかも分からない。どうやって赤子の頃を生きてたかすら知らない。誰に育てられたのか、あるいは育てられてないのかすらも知らない。わかったか能無し」

ガッ!!ドン!!ゴン!!ゴッ!!

「ぐっ…」

「ふむ、４回か。中々少ない方かな。

よし、なら聡明な君に”能無し”な俺から名前を授けよう。

そうだな、この国に因んで『ジャック』と名ずけよう。おめでとうジャック。これで君も”ゴミ”から四月一日千里の駒になるんだ」

〜〜〜

そう思いながら俺はコンビニで買ったアイスの棒を噛んでいた。なんて事ないベンチに座りながら。1人で。

1人で。（2回目）

まあ、真面目な話何故俺が無駄に憂鬱そうにしているかと言うのは…

「体育祭」

そう体育祭である。暑いのでいつもよりも頭が回らない可能性がある。体を動かすこと自体は嫌いじゃない。むしろ好きだ。

ただ、俺一人の個人技のみなら話は早いし基本的に負ける要素も少ない。何人かを除いた場合に限り確実に勝つ。それほどの自負はある。あるとすれば清隆や生徒会長とか、それと副作用だがこれはあと数ヶ月は先の話だ。これは除外してもいい。

ただ…

ただ、だ。午後からの2時間目、体育館で全生徒の顔合わせがあったが、その場でも翔の傍若無人っぷりは変わらないらしい。

今回は俺たちDクラスはAクラスと組。そして、BクラスとCクラスで組を組むという編成で行われる。

そんな中で聞こえてきた翔と帆波の会話。それを要約するならCクラスはBクラスと組まないこと。だ。

まさに翔らしい。一見勝負を投げたように思えるが、あの男程腹の中が見えずらい男も珍しい。いや、いるんだけどなもっと見えずらい奴が何人か…

だが、俺が1番…ほとんどの意識を持っていかれたのは坂柳有栖の存在だ。ああ、あの時間は俺はあいつにほとんどの視線が持ってかれた。

あの時間を、あいつに奪われた。

あいつを見ているとほかの音が聞こえなくなり、胸が疼く。心臓が、脈が早く、鼓動が早くなる。思い出すだけでも同じ現象が起こる。

「これが恋か！」

「何馬鹿な事言ってんの？」

気がつけば目の前に恵がいて、一言放ったがすぐに通り過ぎようとした。

いやうん、別に約束してたわけじゃないから無視してくれて構わないんだが…

「ちょうどいいところに来たな恵！少し俺の悩みを聞いてくれ！」

「…なに？」

「そんな露骨に嫌そうな顔をするなよ。聞きたいことは簡単だ。

〝恋〟とはなんだ？」

「帰る」

「まった！いや、待ってください！」

「…頭大丈夫？あんたが…千里があたしに敬語使うなんて」
名前呼び、今までは『四月一日君』という呼び方をするような関係ではない、かと言って『千里君』という呼び方をする様な事でも無かったが、夏休み中に洋介と名前呼びする事にしたらしいためそれに乗じて呼ばせた。
いつも『あんた』呼びだったからな、少し分かりずらいからなそれだと。
「ギャグムーヴというやつだ。気にするな。暑さで頭はいつもよりは弱ってるけどな。
ふと思ったんだ。〝恋〟とは何なのか、今までそれを体験する事も気にしたことも無かったからな。俺には〝あいつ〟しかいなかったからこの学校に来て嫌でも人と接しなければならないからな。
前にも言った通り俺はモテる。告白される事は少ないくないし、貢いでくるコアなファンもいる。ちなみに言うとそのコアなファンには男もいる」
「うわぁ……」
「呆れてるのか？まあ、そいつらが尊敬的な…舎弟的な気持ちで俺に貢いでるのか、同性愛的感情なのかは俺では分からないけどな。
…それ故という訳では無いが、恋というのはどう言ったものかというものを恵的観点でいいから教えて欲しいと思ってな。ちょうど通りかかったついでだ。このまま会わなかったら夜にでも電話して聞こうとしていたところだ」

「めんどくさ、あたしも別に本当の恋とかしたことないし…
　まあ、あれなんじゃない?その人と一緒にいたいとか、その人の事ばかり考えちゃうとか、そんなもんじゃない?と言うよりほんとなんでいきなりこんな事思ったのよ」
「午後の授業に体育館での集まりで初めて有栖を長時間見た。今までは所謂坂柳派閥の奴らが阻んできたからそんな機会は無かったからな。それでだ、その時に目を奪われたというか目が離せなかった。心臓が高鳴ったような気がしたりもした」
「…なに、あんたはああいう子がタイプなの?」
「確かに有栖は容姿的に見たらトップレベルで可愛い。病弱で儚げ、正に深窓の令嬢と言った所だろうな。
　だが、だ。一緒にいたいという気持はならなかった。これは”恋”と言うよりは”好意”。しかも戦闘…違うな策略、戦術、好戦的なこいつは俺を追い詰める事が出来そうだと思わせる奴だという直感が働いた感じだったんだろうな」
「…はぁ、ほんと悪魔みたいな男ね」
「まあ、悪魔だからな俺は。
　そうなると、今まで一緒にいたいと思った事があるのは同性も含めても今のところ一人しかいないなら」
「どうせジャックでしょ?」

「いや、お前」
「はあ!?」
「”あいつ”は確かに一緒にいて俺は楽だがそこまでの拘りは無いな。これからの事を考えるとな。いなくても困る事はもうない。強いて言うなら身代わりとしての役割だが、それはそれで俺がヘマをしなければいいだけの話だ。
　だが、恵は…」
「待った!やめて!言わないで!」
　俺の言葉を恵は赤い顔をしながら全力で止めた。
「何故止める、俺はこれからどうしてそう思ったかを恵に説明しようと」
「それをやめてって言ってんの!仮に言ったことが本意じゃないとしても面と向かって言われるのは恥ずい!」
「…ふっ…」
「笑うな!!」
「ふふ…悪い悪いあまりにも恵が可愛い反応するものだからな」
「帰る!」
「気をつけろよ」
　俺はずんずん進んでいく恵の背中に手を振りながら見送る。

さてと…そろそろ俺も帰りますかね。暑いし、アイスもとっくに無くなって棒しか無いし。

うわ…噛みすぎてやばいな…

なんで噛んでたんだろうか？別に俺は噛みグセもないし、口寂しいなんてことも無い。煙草とか吸ってなかったし…〝あいつ〟は吸ってたな。

俺自体煙草は吸わないしな。ただ…何故かあいつの煙草の煙は好きだったな。試しに吸ってみた事はあったが一瞬でやめた。これじゃない、と思って。

どうやら俺は〝あいつ〟が〝吸っている〟煙草が好きなのではなくて、〝あいつ〟が〝吸った〟煙草が好きらしかった。

ははは、キモイ。

そういえばなんの話ししてたっけ？

ああ、体育祭だったな。ある程度手を打っておくか、それとも今回は見逃す、いや見送ると言った方がいいか…今は完全に龍園ＶＳ堀北みたいな感じだし、翔も堀北しか見てないからな、あいつの成長の為にも見送ってみようか。

もし俺に…いや無いな。あの堀北が俺に助けを乞う…いや協力を仰ぐなんて確率１パーセント以下か？

さて、次考えなくちゃならないのは有栖か？でも、ものがものだからこの体育祭じゃ

有栖は仕掛けてこないか？

話を聞く限りじゃ好戦的な性格らしいが今のところ目立った動きは俺では確認できていない…康平が落ちてからか？それならもうあと一歩かな。恐らく夏休みの試験で康平の株はかなり大きく下がった。今回の体育祭で持ち直さなければＡクラスは完全に有栖に喰われる。

俺の予想。今回有栖は動かない。

うむ、我ながら確率は高いな、７割は堅い。もっと言えば８割超だ。

…暑い。なんでこんな無駄な事を外で考えているのか、ほんと頭回ってないな。帰るか、そろそろ部屋のエアコンが恋しい。

お？これは…恋か！俺はエアコンに恋をしているぞ！エアコンと一緒にいたい！

馬鹿か…

俺は隣に置いていた鞄を持って寮への道へと体を向けた。

「待って」

俺はその声の方向、つまり後ろを向いた。体を１８０度回転させるとそこには堀北がいた。

「あなたに話があるの」

「俺は無いが、聞くだけ聞こう。暑いから手短にな」

「…なら単刀直入に言うわ。今回の体育祭、あなたにも協力して欲しい」
　俺は…俺の計算が崩れる音を久しぶりに聞いた。計算が外れることはよくあるが、まあまあな時間をかけた計算と予想が崩れるのは久しぶりだ。1年近くは無かった。
「お前が…俺に…協力を仰いだのか？」
「そうよ」
「…誰かの入れ知恵か？
　そうだな…清隆あたりか？」
「いいえ、これは私の判断よ。綾小路君もましてや平田君も関係ないわ。私が考えた結果よ」
「面白い冗談だな。俺は嘘は好きだが、冗談はそこまで好きじゃないぜ？」
「使えるものは使っていく。あなたの身体能力は聞いているし無人島でも見ていた。あなたはほとんどの競技で1位を取れるわ」
「…まあ、それなりの自負はある」
「ならそれを使って欲しい。正直あなたなら平田君あたりに言われれば協力するとは思っていた。でも私が思っている以上にあなたは気分屋だった」
「ふーん…そこまでして勝ちたいのか…なるほど…」
「…それと、優待者を当てる試験の時の事は私が早計だったわ。何も知らず勝手な事を

言ってしまったと思っているわ。本当にごめんなさい

あの堀北が俺に頭を下げるとは…まあ、仮に俺がどんなに堀北の事を嫌っていてもこういう真摯さに応えない訳にはいかない。

うむ、我ながら割とクズみたいな展開は思い浮かんだが、今後のためにこれは保留にしよう。どうせ堀北に言われずともある程度はやるつもりだったし

「いや、あの時はあんな挑発に乗った俺が悪いんだ。あれ、俺の力を見たかったがゆえのやつだろ？悪かった。

今回の体育祭は俺もある程度の種目には出るよ。それで出たものでは優秀な成績を残すことは約束しよう。それに練習もあるなら出られるようにする皆のサポートだってするさ」

「ありがとう四月一日君、感謝するわ。それじゃあこれで」

「おう、また明日」

これは俺の後時のやつが効いたのか、それとも俺が知らない夏休み中に何かあったのか…ふむ、まあいいか。特に興味はない。

今の興味はこの体育祭での俺の立ち回り方についてだ。はっきりとある程度の種目に出ると公言してしまった以上嘘とは言えないし手を抜きすぎて下位に落ちるのは面倒くさい。

仲間と共に1位を目指すぞ作戦も悪くは無いが面白くない。それならまだ全てを裏切り翔に協力する方がまだ幾分か面白い。堀北からの俺の株は大暴落する事になるが。

部屋に着くまで面白い案は思いつくか？

……

お？おぉ！もしかしたら思いついたかもしれないな。

少し今回で俺のキャラクターが面白くない方向へ転がるかと思ったが…少しは巻き返せるかもな。

うん、まあ、今までも面白いかと言われればなんとも言えないが……

よし、それじゃあまた面白い俺へと期待を込めてまた次回。

〜〜〜

よりも下にある」

私は歯を食いしばった。何も言い返せない。私は今まで生きるために…死なないために生きてきた。無様に、無意味には死にたくなかった。”ゴミ”と評されたまま…”ゴミ”と評されたまま何も考えずに生きて死んだ奴らと同じようになりたくないと思いながら生きた。

知恵もない獣のような”ゴミ”達にしか通用しなかった。私はただの”ゴミ”の中の少しだけ知恵がある”ゴミ”だった。

それを今痛感している。

「所詮”ゴミ”は”ゴミ”だったと言うわけだ」

その通りだ。この中で生き残ってもこいつ1人満足させられ無かった。

そして、最初に言っていた通りこれで終わらなかった。

掴まれた頭を何度も地面に叩きつけられた。当然のように鼻血は出て、当然のように歯が何本か折れた。

その後は頭を蹴られ、腕を蹴られ、腹を蹴られ、足を蹴られた。私よりも力は弱いがそれでもそこらの同年位のやつよりも強い。一つ一つの蹴りが重く強い。腕は感覚が無くなっていた。腹を蹴られれば数少ない私の胃の中身をぶちまけた。まともに立つことも出来ない位の足になっていた。

「反抗する気は失せたか？なあ、『ジャック』」
ジャック？ああ、そう言えば名前を貰っていたのだったな。反抗しなければどうなるのだろうか？ああ、言っていたな。こいつの故郷に、日本に連れていかれるのか。
なら反抗すればどうなるのだろうか？このまま殺されるだろうか？
嫌だな。このままならこの中で死んでいった奴らよりも無様だ。なら反抗はやめよう。このまま日本に連れていかれよう。その方が無様ではない。死にもしない。ならそうしよう。
今持てる力を振り絞り地面向けていた顔をそいつに向けた。
「し…ねよ……わた……しは…し…だら…おまえ……を…ころす…」
無様だ。なんとも無様だ。下らない。死んだらお前を殺す？馬鹿だ。死んだらそれまでだ。殺すことはおろか動くことすらできない。馬鹿は死んでも治らないとはよく言ったものだ。死ぬ前が私が1番嫌った、今まで見た中で1番無様だ。
「…面白い…ああ、面白いな。ならやってみろ。俺を殺してみろよ『ジャック』！」
そしてこの国から私という存在は死んだ。